上村左川編

新撰和英文典問答

東京　博文館藏版

例言

一此書は專ら學生諸氏が文法の暗記に便せんとする目的を以て編述したるものにて、和英文典中緊要適切なる條項につきて無數の問題を假設し、一々之が解說を下し、文は成るべく簡明にして暗じ易きを旨とし、努めて潤飾を避けたり。

一此書の程度は中學を標準とし、文法を獨習せんとする者、殊に中學程度以上諸學校入學應試者の參考に資せんとするが故に、從來の其程度諸學校入學試驗問題を參酌して題を假設したるもの少からず。

一此書日本文典、英文典の兩部に別つ、而して成るべく双方とも編次の體裁を同一にし、彼此相對照して理會に便ならしめんと期す、先づ自國語なるが爲めに比較的記憶し易かるべき日本文典を先きにし、英文典は之を後に附したり。

一品詞の分類等は兩文典とも文法家に依りて多少の異說あること
なるが、此書は汎く諸家の說を參考して成るべく穩當にして且
記憶し易き方に從へり。

明治三十六年九月

編者識

新撰和英文典問答目次

日本文典之部

第一章 ●聲音……1……八問
第二章 ●假名遣……7……七問
第三章 ●字音假名遣……10……二十七問
第四章 ●言語總論……18……三問
第五章 ●名詞……19……五問
第六章 ●代名詞……21……五問
第七章 ●動詞……23……三十五問
第八章

●形容詞……第九章……39……十問
●助動詞……第十章……43……十一問
●副詞……第十一章……48……七問
●接續詞……第十二章……51……二問
●感動詞……第十三章……25……二問
●テニヲハ……第十四章……53……十一問
●熟語……第十五章……54……二十問
●文章……第十六章……64……十三問
●聯構文……70……九問

●係結法……第十七章……78……十五問
●呼應……第十八章……85……九問
●雜問……第十九章……91……十六問
●動詞形容詞活用圖……101
●助動詞活用圖……104

英文典之部

●總論……第一章……1……十五問
●名詞……第二章……5……二十七問
●代名詞……第三章……20……十八問

第四章

●形容詞……第五章……二十三問
●冠詞……第六章……四十一問
●動詞……第七章……四十五問
●副詞……第八章……七十五問
●前置詞……第九章……八十九問
●接續詞……第十章……九十三問
●間投詞……第十一章……九十三問
●雜問……二十三問

目次終

新撰

和英文典問答

上村左川編

日本文典の部

第一章　聲音

一　母音及子音の性質を問ふ

答　母音は一に單音とも云ひ、口を開きて聲を發すれば單純に出づる喉音にして、如何程長く呼び延ばすとも音を變ずることなし、五十音中のア、イ、ウ、エ、オの五音是なり、又子音は一に複音とも云ひ、母音と父音と合して生ずるものにて、五十音中上記五個の母音を除きたる四十五音は皆子音なり、子音は長く呼び延ばすときは末は母音に歸す、例へばカーア、チーイ等の如し。

二　父音とは如何なるものを云ふか

答　父音は一に發聲とも云ひ、實は明瞭に音聲に現はれたるものにあらず、母音と相配合して子音を生ずるひゞき無き音なれば、之を現はすべき文字なし、其數は九あり、そは先づク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、ウの音の微なるものと見て可なり、此父音と母音と配合して子音を生ずる狀態は、例へばクアの合してカ、スエの合してセを生するが如し。

三　鼻音とは如何なるものを云ふか

答　鼻音とは五十音外に在る一音にして、鼻孔より出づるものなり、五十音は一音と雖口を閉ぢては發するを得されど、此音のみは全く口を閉ぢるも猶發することを得、即ちンの音にして、此音は概して單獨に出づることなく、他音の下につゞて現はる、例へば、レンブン(新聞)クワンオン(觀音)エンイン(延引)等の如し。

四　拗音とは如何なるものを云ふか

答　五十音中の二箇の音を一音に呼ぶときの音にして、シャガ(車駕)、ハンクワ(繁華)、チュウシン(忠臣)リョウ(龍)などの諸語の傍線を施したる部の如きものを云ふ、

五　促音を説明せよ

答　促音とは氣息の口内に促る聲にして、肺より出で來る氣息を口内にて急に塞ぐより生ずるものなるを以て耳には聞にず、例へばコップ、マッタク(全ク)等の傍線の部の如き即ち是なり、大抵單獨には出でず他の二箇の音の間に現はるゝものなり。

六　約音を説明せよ

答　約音とは二音を連呼するとき發音上の便宜にて兩音合して一音となる場合の音を云ふ、例へば「持ちてある」を「持ちたる」「さしまく」を「ささく」と云ふ時のた、さの如きつゞまりたる音是なり、斯く約する法を一に反切法とも云ひ、一定の規あり、上なる音を父位と云ひ下なるを母位と云ひ、父位と母位とが異りたる行中に在る時は母位と同韻の父位の音に歸し、父母同行に在る時は母位に歸し、父母同韻中に在る時は父位に歸す。

七　略音を問ふ

答　音の連續する時發音上の便宜に隨ひ其中の一音畧せらるゝ場合を云ふ、例へば、かみさし(髪指し)を「かざし」かはゝら(河原)を「かはら」あみしろ(網代)を「あじろ」と云ふが如し。

八　延音とは如何なるものぞ

答　延音とは約音と反對に、一音の二音に延びたる場合の音を云ふ、例へば、「いふ」を「いはゝ」、「語る」を「語らゝ」、「もみぢ」(紅葉)を「もみだひ」と云ふの類是なり。

九　左に擧げたる詞に就きて約音、略音、延音を指示せよ

(1)あかいし(明石)を　あかし(2)見む　を　見ま～　(3)かりいは(廉假)を　かりほ　(4)しかる(然る)を　さる　(5)きえぬ(消えぬ)を きえな～　(6)つたへ(傳へ)を　つて。

答　(1)(3)は略音、(2)(5)は延音、(4)(6)は約音なり。

一〇　轉音とは何ぞ

答　轉音とは二語の合して一語となる場合に、其音が同行中の或音に轉ずるものを云ふ、例へば、なへしろ(苗代)をなはしろ、こゑね(聲音)をこわね、きのは(木葉)をこのはと云ふの類なり。

一一　音便とは如何なるものぞ

答　音便とは音の連續する時發音の便に從ひて、原音を他の母音鼻音促音に變じ、或は音を省き若くは添へて呼ぶことを云ふ、例へば「高き山」を「高い山」、「清くすむ」を「清うすむ」、「依りて」を「依って」、「しか」(詩歌)を「しいか」、「ふゝ」(夫婦)を「ふうふ」と呼ぶが如きものなり。

一二　音便の種類を問ふ

答　音便は數種ありて、人に依りて種々の類別をなせども、先づ概別すれば、い音便、う音便、鼻音便、促音便の四種となすを得べし、い音便はき、しをいに呼換へ(又は或音の下にいを添へて呼ぶものにして、例へば「書きて」を「書いて」、「遠し」を「遠い」、「しか」(詩歌)を「しいか」と云ふの類、う音便は、おかくはひふへほまみむりぬをの諸音をうに呼び變へ、又或音の下にうを添へて唱ふるものにて、例へば、「いもうと」を「いもうと」、「かかふり」(冠)を「かうふり」、「ながく」(長)を「ながう」、「ははき」(箒)を「ははうき」、「したがひて」(隨)を「したがうて」、「さふらふ」(候)を「さうらふ」、「つかへまつる」を「つかうまつる」、「なはし」(直衣)を「なうし」、「やまだ」(山田)を「やうだ」、「かみつけ」(上野)を「かうづけ」、「ひむか」(日向)を「ひうか」、「とりで」(取出)を「とうで」、「まをす」(申)を「まうす」、「ふふ」(夫婦)を「ふうふ」と云ふの類、鼻音便は、び、みを鼻音に轉じ、みは或音の下に鼻音を添へ、若しくは音の下なる鼻音を省きて唱ふるものにて、例へば

「學びて」を「學んで」、「汲みて」を「汲んで」、「すはを」「すんは」、「もんじ」(文字)を「もじ」とするの類なり、又促音便は、ちひりを促音に轉じ、又は或音の下に促音を添ふるものにて、例へば「買ひて」を「買って」、「去りて」を「去って」、「また〳〵」(全)を「まったく」とするの類是なり。

一三　音通及韻通とは何ぞ、例を擧げて説明せよ

答　發音上の便宜に隨ひて或音韻の他の音韻に轉説したるものを云ふ、原音と同行の音に轉説したる場合を音通と云ひ、同列の音に轉説したる場合を韻通と云ふ、前者の例は「かぜぐるま」を「かざぐるま」、「ふり〳〵」を「ある〳〵」と云ふの類にて、後者の例は「はるあめ」(春雨)を「はるさめ」、「をさこ」を「をのこ」と云ふの類なり。

一四　左に擧げたる詞は孰れが音通にして孰れが韻通なるか

(1)「けす」(消)を「けつ」　(2)「しゝとし」(幾年)を「しゝとせ」　(3)「はしる」(走)を「わしる」　(4)「ちち」(父)を「てて」　(5)「おやまふ」(禮)を「うやまふ」。

答　(1)(3)は韻通にして(2)(4)(5)は音通なり。

第二章　假名遣

一五　はに紛はしくわの假名を用ふる詞を擧げよ

答　騒(さわぐ)、乾(かわく)、弱(よわし)、撓(たわむ)、坐(すわる)、周章(あわつ)、植(うわる)、蟬蛻(たわやか)、蕊姑(〳〵わね)、硫黄(ゆわう)、鰯(いわし)、鶚(ひわ)、理(ことわり)、作業(しわざ)、諺(ことわざ)、轡(〳〵つわ)、廓(くるわ)、腸(はらわた)、聲色(こわいろ)、雛(しわ)、泡(あわ)の諸言にして、此外はは の假名なり。

一六　お又はほに紛はしくをの假名を用ふる詞を擧げよ

答　おに紛るゝものは、男(を)、雄(を)、緒(を)、尾(を)、小(を)、苧(を)、折々(をり〳〵)、居(をる)、拜(をがむ)、折(をる)、岡(をか)、荻(をぎ)、囮(をとり)、遠方(をちかた)、玄(をんな)、可笑(をかし)、烏賊がまし(をこがまし)、檻(をり)、納(をさむ)、叫(をめく)、長(をさ)、惜(をしむ)、稚(をさなし)、鶯(をし)、教(をしへ)、頤(をどる)、折敷(をしき)、伯、叔父(をぢ)、老翁(をぢ)、一昨日(をとつひ)、晩稲(をしね)、甥(をひ)伯、叔母(をば)、笄(をの)、桶(をけ)、終(をはる)、女郎花(をみなへし)、戰慄(をのゝく)、蛇(をろち)、丈夫(をとこ)、等にて、此外は、詞の上にっ

〜場合は大抵おの字を用ふ

又ほに紛はしきは詞の中若〜は下に在る場合にして、そは裟(しをる)、薫(かをる)、栞(しをり)、紫苑(しをん)、徐(やをら)、申(まをす)、澤標(みをつくし)、嬋妍(たをやか)、操(みさを)、功(いさを)、十(とを)、芭蕉(ばせを)、水脈(みを)、魚(うを)、青(あを)是なり、此他は大抵はの假名なり。

一七 いに紛はしくゐを用ふる詞を擧げよ

答 いに紛らはしきは、詞の上につ〜場合にして、そは猪(ゐ)、豕(ゐ)、居(ゐ)、井(ゐ)、蟐(ゐもり)、田舍(ゐなか)、勝行(ゐざり)等なり、又いひの双方の紛るゝは詞の中、下につ〜場合にして、そは參(まゐる)、率(ひきゐる)、紅(くれなゐ)、紫陽花(さちさゐ)、藍(あゐ)、宿直(とのゐ)、基(もとゐ)、慈姑(くわゐ)、乞食(たたゐ)、位(くらゐ)是なり。

一八 ねひに紛はしくいを用ふる詞を擧げよ

答 櫂(かい)、悔(くい)、老(おい)、報(むくい)

一九 えへに紛はしくゑを用ふる詞を擧げよ

答 餌(ゑ)、繪(ゑ)、醉(ゑふ)、烏帽子(ゑぼし)、彫(ゑぐる)、吐(ゑづく)、穢多(ゑた)、唉(ゑむ)、槐(ゑんじゅ)、智惠(ちゑ)、髮(こゑ)、坐(ゐる)、陶(ゐる)、末(ゐる)、故(ゆゑ)、机(つくゑ)、植(うゑ)、飢(うゑ)、巴(ともゑ)、杖(つゑ)にして此他にはえ又はへの假名なり。

二〇 ぢに紛はしくじを用ふる詞を擧げよ

答 不(じ)、虹(にじ)、匙(さじ)、雉(きじ)、辻(つじ)、籤(くじ)、褌(はじ)、刀自(とじ)、交(まじる)、詩(なじる)、彈(はじく)、貉(むじな)、蜆(しじみ)、假床(さじき)、聖(ひじり)、挫(くじく)、抉(くじる)、蹂(にじる)、始(はじめ)、質(あじか)、鏃(やじり)、主(あるじ)、纓應(あるじ)、甚(いみじ)、羊(ひつじ)、連(むらじ)、頂(うなじ)、同(おなじ)、躑躅(つゝじ)、鰓(つむじ)、著(いちじるし)、蹴(まなじり)、短(みじかし)、慾(なまじひ)、禁厭(まじなひ)、荒涼(すさまじ)、辱(かたじけなし)にして此外は概ねぢの假名を用ふ。

二一 づに紛はしくずを用ふる詞を擧げよ

答 不(ず)、賜(もず)、數(かず)、箸(はず)、葛(くず)、錫(すゞ)、鈴(すゞ)、疵(きず)、雀(すゞめ)、漫(すゞろ)、鼠(ねずみ)、鱧(すゞき)、涼(すゞし)、蚯蚓(みゝず)、子(たゝずむ)、準(なずらふ)にして此外は大抵づの音なり。

第參章　字音假名遣

二二　い　ゐの紛はしき字音を區別せよ

答　ゐの假名を用ふるものは、爲、惟、位、委、偉、緯、違、圍、唯、維、惟、胃、長、彙、威、尉、(以上ゐ)院、員、韻、頑(以上ゐん)域(ゐき)等にして、此他は大抵いの假名を用ふ。

二三　あう　あふ　おう　わう　をうの區別を示せ

答　あふは押、狎、鴨、凹、壓、おうは謳、漚、歐、鷗、應、等にして、わうは王、往、汪、旺、枉、皇、凰、黄、横、をうは翁、泓等にて、外は概ねあうの假名なり。

二四　いう　いゆう　ゆう　いふの區別を示せ

答　いふは邑、挹、悒、揖等にして此外は大抵いう　いゆう　ゆうの假名なり、されどいゆう　ゆうはいうと書くも妨げなし。

二五　え　ゑの區別を示せ

答　ゑの假名を用ふるは惠、慧、會、繪、鐵、回、廻、穢、衛、(以上ゑ)裏、違、禊、園、鴛、苑、宛、婉、怨、媛、援、瑗、垣、圓、(以上ゑん)越、鉞、曰(以上ゑつ)等にして、其他は概してえの假名なり。

二六　お　をの區別を示せ

答　をの假名を用ふるは、烏、嗚、惡、汚、(以上を)温、穏、怨、園、遠、苑、鴛(以上をん)等にして此外は大抵おの假名を用ふるなり。

二七　かう　てう　かふ　こふ　くわうの區別を示せ

答　こふを用ひるは、怯、刼、業、かふは甲、狎、匣、合、給、恰、洽、蛤、閤、盍、搕、闔、又こうは口、叩、吼、抱、苟、鉤、后、垢、逅、侯、候、喉、猴、工、功、攻、紅、虹、訌、貢、控、鴻、洪、供、港、公、構、溝、箏、弘、肱、亘、恒、くわうは光、晃、恍、擴、曠、荒、鑛、皇、徨、惶、遑、蝗、篁、黄、横、觥、宏、薨、朓等にして其他は大抵かうの字を用ふ。

二八　きう　きふの區別を示せ

答　きふの假名を用ふるは急、及、吸、汲、級、笈、給、泣、翕等にして、其他は大概

きうの假名と知るべし。きゆうはきうと記して妨げなし。

二九 けう けふ きよう きやうの區別を示せ

答 けふの假名を用ふるは協、夾、怯、脅、劫、業など、けうの假名を用ふるは喬、叫、竅、梟、教、皎、蕘など、又きようを用ふるは共、恭、恐、凶、胸、恂、興、洽、鼎、凝などにして、此外は大抵きやうの假名なり。

三〇 さう さふ そうの區別を示せ

答 さふは插、匝、雜、颯、そうは總、送、怱、叢、宗、宋、曹、倘、走、叟、奏、嗽などにして、此他は大抵さうの假名なり。

三一 しふ しうの區別を示せ

答 しふは習、執、集、緝、澁、漏、襲、拾、十などにして此外は大抵しうなり、しゆうはしうと記しても妨げなし。

三二 せふ せう しよう しやうの區別は如何

答 せふは妾、摂、渉、浹、攝、葉の類、せうは梢、小、少、昭、肖、鍬、蕉、憔、笑、

燒、篠、椒の類、又しようは鐘、衝、松、頌、誦、春、悚、蹤、稱、升、證、勝、承、冗、丞、繩、乘の類にして、其他は大抵しやうの假名なり。

三三 たふ たう とうの區別は如何

答 たふは答、沓、衲、納の類、とうは東、同、萱、桶、冬、統、豆、兜、透、寳、登、藤、鬪、童、動の類にして此の外は大抵たうの假名と知るべし。

三四 ちふ ちう ちゆうの區別は如何

答 ちふは蟄、蟄にして此他はちうの假名なり、ちゆうはちうと記して可なり。

三五 てふ てう ちやう ちようの區別は如何

答 てふは蝶、疊、帖、貼の類、てうは朝、兆、超、趙、超、凋、鳥、弔、釣、條の類、又ちようは重、冢、寵、徵、澄の類にして、此外は大抵ちやうの假名なり。

三六 なふ なう のうの區別は如何

答 なふは納、衲、のうは農、能の類にて、他は大抵なうの假名と知るべし。

三七 にふ にうの區別は如何

答 にふは入、にうは柔、乳なり。

三八 ねう ねふ にやう にようの區別は如何

答 ねうは饒、屎、溺の類、ねふは捻、にやうは嬢、娘、にようは女（但し女房、女御などの場合にてなり）

三九 はふ ほふ はう ほうの區別は如何

答 はふは法、乏（漢音）ほふは乏（呉音）ほうは蓬、鳳、麗、封、峯、奉、朋、萍、矛、畔、袋の類にて外は大抵はうの假名なり。

四〇 へう ひよう ひやうの區別は如何

答 へうは約、表、票、漂、瓢の類、ひようは氷、冰、馮の類にて他は概してひやう。

四一 まう もうの區別は如何

答 もうは朦、瞢、蒙、濛の類にして他は概してまうの假名と知るべし。

四二 めう みやうの區別は如何

答 めうは苗、妙の類にて他は大抵みやうの假名なり。

四三 やう よう えう えふの區別は如何

答 えふは葉、曄、えうは遙、要、曜、夭、幺、杳の類ようは用、容、孕庸等にして他は大抵やうなり。

四四 らう らふ ろうの區別は如何

答 らふは臘、拉の類、ろうは蠟、弄、樓、陋、漏の類、他は概してらうなり。

四五 りふ りうの區別は如何

答 りふは立、笠、粒にて他はりうの假名なり、りゆうはりうと書して可なり。

四六 れふ れう りよう りやうの區別は如何

答 れふは獵、れうは聊僚了料鶴寥の類、りようは龍陵楞の類他は大抵りやう

四七　じ及びぢの區別は如何

答　ぢは持、治、尼、峙の類(以上ぢ)、女、條、杙、(以上じょ)陣、沈、塵(以上じん)軸、竺、蚓、忸(以上ぢく)帙、暫、昵(以上ぢつ)直(ぢき)著(ぢゃく)辱(ぢょく)　珍(ぢゅつ)等にして他は概してじの假名なり、又ずは陪、瑞、蕊(以上ずい)の類にして他はづの假名也。

四八　改正字音を問ふ

答　過般文部省にては、改正小學校令施行細則を以て、小學校にて從來の字音假名遣ひを用ふることを全廢し、寫音法を左の如く改正せられたり、(上部に並べ記すは舊來の字音の假名にして下部に記せるが改正のものなり)

い	ゐ
あう　あふ	おう　わう
いふ　いう	ゆう　ゆう
え	ゑ
お	を
かう　こう	かふ　こふ　くわう

きう	きゅー
きふ	きゅー
けふ	きょー
さう	そー
さふ	そー
しふ	しゅー
せふ	しょー
たふ	とー
ちふ	ちゅー
てふ	ちょー
なふ	のー
にふ	にゅー
ねふ	にょー
はふ	ほー
へう	ひょー
まう	もー
めう	みょー
やう	よー
ちう	ろー
りふ	りゅー
れふ	りょー
じ	じ
ぢ	ぢ
ず	ず
づ	ず

第四章　言語總論

四九　我國言語の三大別を擧げて各其特質を記せ

答　我國語は大別して體言、用言、助辭の三種とす、體言とは語尾の決して動かぬ詞、用言とは語尾の動きて事物の作用と形狀を表はす詞、助辭とは單獨に用ひては意義なく、體言用言に附屬して其働きを助くる詞を云ふ。

五〇　體言、用言、助辭の例各二三種づゝを擧げよ

答　體言は花、愈（いよ〳〵）、及（および）等の如く、用言は「遊ぶ」、「おもしろし」、「とほし」等又助辭は「花を人に送りたり」、「我は學校へ行きけり」の點を付したる者の類

五一　品詞とは何ぞ

答　品詞とは體言用言助辭の汎べてを通じ、言語の成分を單獨に存在し得るを限りとして出來得るだけこまか〳〵分割したる其各個に與へたる名稱にして、例へば「楠正成は日本の忠臣なり」と云ふ文章に引はなちたる各個は皆品詞なり。品詞の種類は名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、助動詞、接續詞、感動詞、テニヲハ等

第五章　名詞

五二　名詞の定義及其種類を問ふ

答　名詞とは有形無形を問はず汎て事物の名を表はす詞の總稱にして、其性質によりて普通名詞、固有名詞、有形名詞、無形名詞、本來名詞（又は體言）轉來名詞（又は假體言）、單名詞、合名詞、複名詞等の名稱を下す。

五三　有形名詞と無形名詞との區別を示し且例を擧げよ

答　其表はせる事物が形體を有するものならば之を有形名詞と云ひ、形體を有せざるものならば無形名詞と云ふ、例へば人、木、山、川、船、筆、等は有形名詞にして、時、功、理論、仁義等の類は無形名詞なり。

五四　普通名詞と固有名詞との區別を示し且例を擧げよ

答　普通名詞とは同種類の事物に普く通じて用ひらるゝ名詞を云ひ、固有名詞とは一事物に固有して他には通用すべからざる名稱を云ふ、例へば草、木、鳥、手足、教育等の如きは同種類の汎ての事物に通用するが故に普通名詞にして楠正成、富士山、日本

山城等の如きは其一事物に固有したる名稱にて他に通用すべからざるが故に固有名詞なり。

五五 體言、假體言の區別を擧げ且例を示せ

答 體言(一に本來の名詞)とは本原よりの名詞にして例へば花、雨、風、月、等の如く、又假體言(一に轉來の名詞)とは動詞形容詞等の用言より轉じて名詞となりたるもの例へば樂しみ、願ひ、遊び、赤、黑等の如し。

五六 單名詞、合名詞、複名詞の區別を擧げ且例を示せ

答 單名詞とは、花、風、天、川等の如く構造の單一なるものを云ひ、合名詞とは朝風、高山、朝起、遠吠の如く、名詞と、他の一語と連合したるものを云ひ、複名詞とは天つ風、蝦夷が島等の如く二個の單名詞とテニヲハとより構成したるものを云ふ。

第六章 代名詞

五七 代名詞の定義及其種類を問ふ

答 代名詞とは名詞に代へて用ふる詞の總稱にして、其性質に依りて人代名詞、指示代名詞、疑問代名詞の三種とす。

五八 人代名詞の種類及例を擧げよ

答 人代名詞は人の名に代用する詞にして、一人稱、二人稱、三人稱の三種に別つ、一人稱は記者又は話者が自身の名の代りに用ふるのものにして、我、われ、余、自分、僕、小生等の如く、二人稱は記者又は話者が談じかゝる人の名の代りに用ふるものにして、君、汝、足下、おん身等の如く、三人稱は記者又は話者が自己及び話し相手以外の或人の名に代ふるものにして、彼れ、あれ、なにがし等の如き是なり。

五九 指示代名詞の種類及例を擧げよ

答 事物、場所、方向、時等の本名の代りに用ふる詞にして、事物の名に代用する場合は是れ、其の、彼れ、等の如く場所の名に代用する場合は此處、其處、彼處、の如

く、方向の名に代ふる場合は此方、其方、彼方の如く、時の名に代用する場合は今日、明日等の如き是なり。

六〇 指示代名詞の稱とは何ぞ例を擧げて説明せよ

答 指示代名詞には近稱、中稱、遠稱の三種の區別あり、近稱とは其指示する事物、場所、方向が記者又は話者が自己に最近き場合に用ふるものにして、例へばこれ、この、こちら、こなた、こゝ等の如く、中稱は其の稍遠き場合に用ふるものにして、例へばそれ、その、そこ、そちら、そなた等の如く、遠稱とは最遠き場合に用ふるものにして、例へばあれ、かれ、あしこ、かしこ、かなた、あなた等の如き是なり。

六一 疑問代名詞(一に不定代名詞)を例を擧げて説明せよ

答 人、事物、場所、方向、時の不定なる場合に用ふる代名詞にして、例へば誰、何、いづく、いづち、いつ等の如き是なり。

第七章 動詞

六二 動詞と云ひ用言と云ふには如何なる差違あるか

答 用言とは語尾の活く詞の總稱なれども、動詞とは其中に就きて形容詞、助動詞を除きての名稱なり、或は用言を作用言形狀言の二種に別つこともあり。

六三 動詞の活用を例を擧げて示せ

答 讀まむ、讀みたり、讀む、讀め、若しくは試みむ、試みたり、試む、試みよの如く語尾の變化するを云ふ。

六四 動詞の五轉(又五段活用)なるものを説明せよ

答 五轉とは動詞の語尾の五樣に變化することにて、即ち將然言、連用言、終止言、連體言、既然言、是なり、今其性質を説明せん、茲に書といふ詞を以て例せば五轉變化の模樣は左の如し。

(一)將然言　書かと語尾の轉ずる時をさして云ひ、これは「書かば」、「書かん」、「書かず」などの如く下に助動詞接續詞の添ひて始めて意味をなすべ

きものにして未來の意を表はすを得る語なり。

(二)連用言　書きと轉ずる時をさして云ひ、直ちに他の動詞助動詞などに連り活くを得る言語なり。

(三)終止言　書くと轉じて下に續かざる場合即ちそれにて言語の意味終る時を云ふ。

(四)連體言　書くと轉じて而も下に續く場合(例へば「書く人」「書く文」等の如く)即ち下の體言に連續する時を云ふ。

(五)既然言　書けと轉じて而も下に助動詞接續詞に續く場合(例へば「書けば」「書けども」の如く)にして、過去に關する意即ち既に然る意を表はす詞を云ふ。

六五　五轉の變化は汎べての動詞を通じて一樣なりや

答　汎べて動詞此五轉の變化を有せざるはなしと雖、變化する模樣は必らずしも一樣ならずして數種の別あり、そは動詞によりて活用に差違あるより來るものにして、其異なる模樣は左の如し。

將然言	連用言	終止言	連體言	既然言
讀 よま	よみ	よむ	よむ	よめ

報 むくい	むくい	むくゆ	くむゆる	むくゆれ
植 うゑ	うゑ	うう	ううる	ううれ
着 き	き	きる	きる	きれ
蹴 け	け	ける	ける	けれ

外に四種の例外あり。右に擧げたるを正格と稱し他の四種を變格と稱す。

六六　動詞活用の種類を問ふ

答　動詞の活用には九種の別あり、其中五種は語尾變化の規則正しきものにて之を正格と稱し、他の四種は語尾變化の不規則なるものにして之を變格と稱す左の如し、

- 正格
  - (一)四段活　(二)上一段活　(三)下一段活
  - (四)上二段活　(五)下二段活
- 變格
  - (一)加行變格　(二)佐行變格
  - (三)奈行變格　(四)良行變格

六七　動詞の正格變格とは何を標準としての區別なるか

答　汎ての動詞の中にて一樣の活用をなす語の多き方即ち尋常なる方を正格と定め、少き方即ち尋常ならざる方を變格と定めたるなり。

六八　四段活を説明し例を擧げよ

答　五十音圖中あいうえの四韻列に亘りて活くものを云ふ、例へば行く、讀むと云ふ語の、ゆか、ゆき、ゆく、ゆく、ゆけ。よま、よみ、よむ、よむ、よめ、の如く、カ、キ、ク、ケ。マ、ミ、ム、メなどの四段に語尾の變化するものなり。

六九　四段活のある行を擧げ各行に就て二種宛詞の例を示せ

答　四段活は、か、さ、た、は、ま、らの六行に在りて、他のあ、な、や、わの四行にはなし、例左の如し。

加行（書）（退）かきくけ
佐行（推）（寫）さしすせ
多行（打）（立）たちつて
波行（學）（習）はひふへ
麻行（讀）（住）まみむめ
良行（釣）（成）らりるれ

七〇　上二段活とは如何例を擧げて説明せよ

答　五十音圖中い、うの二韻列にのみ語尾を變化し、其他はる、れの詞の副りて五轉の活きを成すものにて例へば、起く、恨むと云ふ語の、おき、おき、おく、おくる、おくれ。うちみ、うちみ、うちむ、うちむる、うちむれの如く活くを云ふ。

七一　上二段活のある行を擧げ、各行一種づゝ詞の例を示せ

答　上二段活は、か、さ、た、は、ま、や、らの七行にありて、あ、な、わの三行にはなし、例左の如し。

加行（生）きくくれ
佐行（堀）しずずれ
多行（落）ちつつれ
波行（戀）ひふふれ
麻行（恨）みむむれ
也行（悔）いゆゆれ
良行（戀）りるるれ

七二　下二段活とは如何に、例を擧げて説明せよ

答　五十韻圖中う、え、の二韻列にのみ語尾の變化をなし、其他はる、れの詞の添ひて五轉を活くものにて、例へば授く、痩すと云ふ詞の、さづけ、さづけ、さづく、さづくる、さづくれ。やせ、やせ、やす、やする、やすれの如く活くを云ふ。

七三　下二段活のある行を擧げ各行一種づゝ詞の例を示せ

答　下二段活はあ、か、さ、た、な、は、ま、や、ら、わ、の十行悉く活く、例は

阿行	(得)	え	え	う	うる　うれ
加行	(受)	け	け	く	くる　くれ
佐行	(任)	せ	せ	す	する　すれ
多行	(捨)	て	て	つ	つる　つれ
奈行	(連)	ね	ね	ぬ	ぬる　ぬれ
波行	(替)	へ	へ	ふ	ふる　ふれ
麻行	(求)	め	め	む	むる　むれ
也行	(絶)	え	え	ゆ	ゆる　ゆれ
良行	(晴)	れ	れ	る	るる　るれ
和行	(植)	ゑ	ゑ	う	うる　うれ

七四　上一段活とは如何例を擧げて説明せよ

答　五十韻圖中いの韻列のみにして語尾には變化なく、唯る、れの詞の添はりて五轉の活きをなすものを云ひ、例へば、着る、干るの詞にて、き、き、きる、きる、きれ、ひ、ひ、ひる、ひる、ひれの如く活くを云ふ。

七五　上一段活のある行を擧げ、各行一種づゝ詞の例を示せ

答　上一段活は、か、な、は、ま、や、わ、の六行にありて、あ、さ、た、らの四行にはなし。

加行	(着)	き	き	きる　きれ
奈行	(煮)	に	に	にる　にれ
波行	(干)	ひ	ひ	ひる　ひれ
麻行	(見)	み	み	みる　みれ
也行	(鑄)	い	い	いる　いれ
和行	(居)	ゐ	ゐ	ゐる　ゐれ

七六 下一段活とは何ぞ例を擧げて説明せよ

答 五十韻圖中えの韻列のみにして語尾には變化なく、唯る、れの詞の添はりて五轉の活きを成すものを云ふ、これは加行のみにして他の九行にはなし、即ち左の如し。

加行（蹴）　け　け　ける　ける　けれ

七七 加行變格とは如何、例を擧げて説明せよ

答 五十音圖中お、い、うの三韻列に、る、れ、の添はりて活くものにして、此變格は加の一行に限り、而も唯來の一語あるのみなり、例左の如し。

加行（來）　こ　き　く　くる　くれ

七八 加行變格が他の或活用と異れるは如何なる點か

答 此活のき、くと活く處は四段活の活き樣に同じく、又く、くれと活く處は上二段の活き樣にして、猶別におの韻列なるこに活く等種々錯雜したる處あればなり。

七九 佐行變格の例を擧げよ

答 五十音圖中え、い、うの三韻列に、る、れ、の詞の添はりて活くものにして、此變

格は佐の一行に限り、こゝに活くべきは唯爲、御坐（おはす）の二語あるのみなり、例は

佐行（爲）　せ　し　す　する　すれ

八〇 佐行變格が他の或活用と異れる點を示せ

答 此活用にて、し、すと活くところは四段活と同じ活き樣なれど、せ、する、すれと活くは下二段の活きざまなればなり。

八一 奈行變格の例を擧げよ

答 五十音圖中、あ、い、うの三韻列にる、れ、の添りて活くものにして、此變格は佐の一行に限り、こゝに活く動詞は、死ぬ、去ぬ（いぬ）の二語あるのみ、例は

奈行（死）　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ

八二 良行變格の例を擧げよ

答 五十音圖中、あ、い、う、えの四韻列に亘りて活くものにて、此變格は良の一行に限りこゝに活くべき動詞は有、待、居の三語あるのみなり、例は

良行（有）　ら　り　る　る　れ

八三 奈行變格、及良行變格は各如何なる點が他の活用と違へるか

答 奈行變格は其の、な、に、ぬ、ねと活くは四段活の活き樣なれど、に、ぬ、ぬる、ぬれと活くは上二段活に同じく、又良行變格は、り、る、れと活くは四段の活き樣なれど第三轉のりとなりて活くところ異ればなり。

八四 外國の熟語及び我國の體言(名詞)の用言(動詞)に用ひらるゝ場合は、何れの活に活かすべきか

答 佐行變格に活かす例なり、例令へば、花觀せゝ、花觀し、花觀す、花觀する、花觀すれ。學問せゝ、學問し、學問す、學問する、學問する等の加し。

八五 四段活用に屬する普通なる動詞の例數十箇を擧げよ

答 左の如し、

加行……あく(飽)、あふぐ(仰)、あざむく(欺)、いそぐ(急)、ひく(引)、なく(泣)、いなゝく(嘶)、みちびく(導)、ふく(吹)、あるく(歩)、うごく(動)、

佐行……うつす(移)、かす(貸)、おす(押)、いそがす(令急)、けす(消)、こゝろざす(志)、てらす(照)、つひやす(費)、いだす(出)、くづす(崩)、

多行……あやまつ(過)、かつ(勝)、たつ(立)、ひとり、こつ(獨言)、まつ(待)、

波行……あそぶ(遊)、いはふ(祝)、うしなふ(失)、おふ(追)、つくろふ(繕)、かよふ(通)、くらふ(食)、すくふ(救)、そろふ(揃)、とふ(問)、になふ(擔)、ならふ(習)、

麻行……このむ(好)、あやしむ(怪)、いさむ(勇)、うむ(產)、うらやむ(羨)、すゝむ(涼)、たのしむ(樂)、たわむ(撓)、つゝしむ(愼)、すゝむ(進)、

良行……いかる(怒)、あたる(當)、いのる(祈)、あまる(餘)、あらたまる(改)、いたる(至)、うつくしまる(憐)、おこたる(怠)、おとる(劣)、かぶる(被)、

八六 上二段活用に屬する普通なる動詞の例を數箇を擧げよ

答 左の如し

加行……すぐる(過)、つくる(盡)、いくる(活)、よくる(辟)、わくる(分)、

多行……おつる(落)、もつる(閉)、はづる(恥)、よづる(攀)、もみづる(紅葉)、

波行……おふる(生)、こぶる(媚)、しのぶる(忍)、こふる(戀)、ほろぶる(亡)、

麻行……うらむる(恨)、こゝろむる(試)、
也行……おゆる(老)、くゆる(悔)、むくゆる(報)、
良行……おるゝ(下)、こるゝ(懲)、ふるゝ(舊)、

八七 下二段活に屬する普通なる動詞の例數箇を擧げよ

答 左の如し

加行……あくる(明)、つゞくる(續)、わくる(分)、たひらぐる(平)、のくる(退)、あぐる(擧)、たすくる(助)、とぐる(遂)、
佐行……うする(失)、あする(淺)、きする(着)、しらする(知)、やする(痩)、まゐらする(參)、ふする(臥)、のする(載)、きかする(聞)、
多行……いづる(出)、すつる(捨)、くはだつる(企)、あつる(當)、あわつる(周章)、
奈行……かぬる(兼)、つかぬる(束)、はぬる(刎)、ゆだぬる(委)、ぬる(寢)、
波行……かふる(換)、あたふる(與)、つかふる(仕)、ならぶる(並)、とらふる(捕)、
麻行……あがむる(崇)、あたむる(暖)、いさむる(諫)、きはむる(極)、こむる(籠)、
さむる(醒)、きよむる(清)、いましむる(誡)、いさむる(諫)、
也行……いゆる(愈)、きゆる(消)、そぴゆる(聳)、ひゆる(冷)、みゆる(見)、もゆる(燃)、ほゆる(吼)、さかゆる(榮)、こゆる(越)、きこゆる(聞)、おぼゆる(覺)、

良行……あるゝ(荒)、おそるゝ(恐)、くるゝ(呉)、しぐるゝ(時雨)、たるゝ(垂)、すぐるゝ(勝)、こがるゝ(焦)、かるゝ(枯)、うまるゝ(生)、あふるゝ(溢)、
和行……うゑる(飢)、うゑる(植)、すうる(居)、

八八 上一段及下一段活用に屬する動詞を悉く擧げよ

答 上一段に屬するは加行に きる(着)、奈行に にる(似)、波行に ひる(干)、ひる(簸)、ひる(嚏)、麻行に みる(見)、也行に いる(射)、いる(鑄)、和行に ひきゐる(率)、もちゐる(用)、ゐる(居)、ゐる(率)にして、又下一段に屬するは加行に ける(蹴)の唯一語あるのみ。(右の中用には、種々の説ありは行にも用ふ)

八九 下に擧げたる詞の屬する活用の種類を問ふ

(1)うめく(呻吟)、(2)にほはす(令匂)、(3)くだつる(隔)、(4)ぱべる(侍)、(5)たはむるゝ(戯)、(6)おもほゆる(思)、(7)なぐる(和)、(8)はびこる(蔓)、

答 (1)(2)(8)は四段話、(3)(5)(6)(7)は下二段話、(4)は良行變格なり。

九〇 動詞の自動他動の別を説明せよ

答　自動詞とは、其動詞の表はす動作が他の事物に直接に何等の關係をも及さず、即ち其物の自つから然るものを云ふ、他動詞とは之に反して其表はす動作が他の事物に直接に關係を及ぼすものを云ふ、例せば左の如し

自動詞……花咲く、月入る、琴の音遠く聞ゆ、の類なり

他動詞……人が犬を撲つ、教師は生徒に物を教ゆ、の類なり

九一　能動、受動とは如何なる區別なるか

答　能動とは自動他動の別なく、動作者に、十分其動作をなす能力の具はれる意をあらはす場合を云ひ、又受動とは他より我に受くる動作を云ふ、例せば左の如し

能動……我今日此書を誦み終へらる、快く働かるべし、の類なり

受動……人に呼ばる、我軍大に破られたり、の類なり

九二　役動、被役動とは如何なる區別なるか

答　役動とは他者を役して或動作を起さしむる場合を云ひ、被役動とは他者の使役に依りて、我の或動作をなさしめらるゝ場合を云ふ、例せば左の如し

役動……某に書を讀ます、僕に木を植ゑしむ、人に物を探さす、の類なり

被役動……強いて酒を飲ませらる、書を讀ませらる、主人に木を植ゑしめらる、人に物を探させらるの類なり。

九三　自動詞他動詞の普通なる實例數箇を擧げよ

答　散る、起く、浮く、かゝる(懸)等と云ふ場合は自動詞にして、散らす、起す、浮かす、懸く、等と云ふ場合は他動詞なり。

九四　崇敬格を問ふ

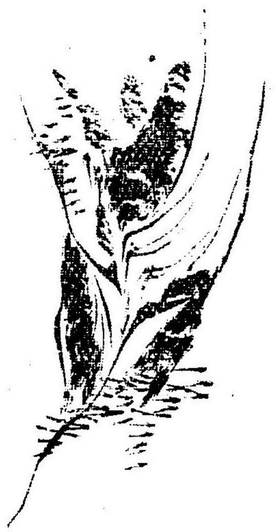
答　崇敬格とは動作等を言ひ表はすに崇敬の意を添ふるものにて、之れに二種あり、一は尊敬の意を有する詞を用ふるものにて、例へば、御覽ず、聞しめす、おぼす、奉るの類なり、又一は能動、受動、若くは役動、被役動等をあらはす語と同一の語形を用ふるものにて、書を讀まる、行かせらるの類是なり。

九五　命令格は如何にして成れるか

答　四段活と奈行變格、良行變格に於ては第五轉即ち已然言を以て命令詞とし、其他の活(上二段、下二段、上一段、下一段)加行變格佐行變格は第一轉即ち將然言を以て命令詞とす、尤も此中四段活と、奈行、良行の三變格を除て、他は悉く末によの添はりて始めて命令詞となるなり

九六　活用の各種に就て命令格の實例一二種づゝを擧げよ

答　四段活にては、行け、動け、示せ、奈行變格には、去ね(いね)死ね、、良行變格にては、居れの類、以上はよの添はざるもの、自餘のよの添ふものは下二段活には受けよ、出でよ、上二段活には閉ぢよ、珊ぢよ、下一段活にては蹴よ、上一段活にては煮よ見よ、加行變格にては來よ、佐行變格にては爲よ(せよ)等の類なり、



第八章　形容詞

九七　形容詞の特質を説明し、且例を擧げよ

答　形容詞は一に形狀言とも云ひ、用言の範圍に屬し、事物の形狀、性質、品位、分量等を云ふ詞にして、例へば高き山、善き人、悲しき我身、路遠し、波荒し、等の線を附したる詞の如きものを云ふ。

九八　形容詞の活用を問ふ

答　形容詞の語尾活用は動詞とは異にして、其活用の種類も唯二つあり、即ち久活志久活、是なり、久活は、例へば善しと云ふ形容詞のよく、よく、よし、よき、よけれと活くが如く、志久活は、例へば嬉しと云ふ詞の、うれしく、うれしく、うれし、うれしき、うれしけれと活くが如し。

九九　形容詞と動詞と活用の異れる點を示せ

答　動詞に在りては正格變格を問はず、孰れの活も或一行中にのみ活きて他の行には跨らざれど形容詞に在りては必らずしも一行内と限らず他の行に跨りて活く、即ち上

項の例のよく、よし、よき、よけれの如き〜く、き、けは加行なれどしは佐行なるが如し。

一〇〇　形容詞の五轉（五段活用）を圖示せよ

答　形容詞五轉の作用は動詞と同じ即ち左の如し

將然言	連用言	終止言	連體言	既然言	
深	ふかく	ふかし	ふかき	ふかけれ……	久活
嬉	うれしく	うれし〜	うれしき	うれしけれ……	志久活

一〇一　形容詞の久活と志久活との區別を問ふ

答　兩者は殆んど差違なきが如く、久活のみにて足れるが如く思はるゝ程なれど、唯第三轉（終止言）の所にて、志久活は久活と異なれり、例へば悲し、嬉し等の詞を假りに久活の例に依りて活かすとせば、第三轉に於て嬉しゝ、悲しゝとならざるべからざる筈なれど、斯かる場合には末をしゝと云はずして單にしとのみ云ふ例なるにより、此活を別に志久活として設けたるなり。

一〇二　久活、志久活に活くべき形容詞の實例を類別して擧げよ

答　久活の例は深く、遠く、低く、多く、うま〜、靜け〜の如く、志久話の例は薫しく美しく、親しく、久しく、優し〜等の如し。

一〇三　形容詞の將然言と動詞の將然言との差を例を擧げて示せ

答　形容詞の將然言は「川深〜ば舟にて渡らん」、「花美しくば觀にゆかむ」の深く、美しくの如きものにて動詞と同じく未來の意を表せども、動詞の如くむを附するとなし（例へば動詞は開かと云ふ將然言にむを附して語をなせども形容詞にはさるとなし）

一〇四　形容詞の連用言を例を擧げて說明せよ

答　形容詞の連用言は動詞の上につきて其動作を形容する働きあり、例へば「遠く離る」「親しく交る」「樂しく遊ぶ」などの遠く、親しく、樂しくの如し。

一〇五　形容詞の終止言、連體言、既然言の特質と實例を示せ

答　終止言は「天高し」、「冬は寒し」の高し、寒しの如く形容を表し終りて下に續かざる時に用ひ、連體言は「賢き人」、「優しき詞」の賢き、優しきの如く名詞の上に續き、

又既然言は「水清ければ魚棲まず」、「久しけれども倦まず」などの清けれ、久しけれの如く、下の受辭に續きて既然の意を表はし、又係辭を得れば、「待つこそ久しけれ」の久しけれの如く結辭となる。

一〇六　形容詞が名詞となる場合を示せ

答　形容詞の語根にか、さ、げ、らの添ふ場合は動詞となる、例へば、ふかさ(深)、とほさ(遠)、ふかみ(深)、きよげ(清)、さむげ(寒)、きよら(清)などの如し、

第九章　助動詞

一〇七　助動詞とは如何

答　助動詞は普通には動詞の下に附きて、其活動を助くる詞なれど或は助動詞、名詞、形容詞等の下に附く場合もあり「眠りぬ」、「語らしむ」、「眠りたりき」、「善きなり」「君、君たり」、「聞くがごとし」、「もみぢせり」などの線を附したるは皆助動詞也。

一〇八　助動詞の例數種を擧げよ

答　左に種別して擧げたるもの、中線を附したるは皆助動詞なり

動詞の下に付く場合は……「歩みたり」、「謂みぬ」、「思ひき」、「植ゑしむ」等、

他の助動詞の下に付く場合は……「云ひてき」、「行かしめぬ」、「見ざりけり」等、

名詞の下に付く場合は……「月ならば云々」、「雪なり」、「父たり」、「子たり」等、

一〇九　助動詞は動詞を助けて如何なる効を爲すか

答　助動詞は動詞を助けて希望、疑問、推定、命令、否定、崇敬、時、等其他諸種の意味を完成せしむるものにて、今書くと云ふ動詞を助くる場合を以て例せば、書きた

し、(希望)、書くか(疑問)、書くらん(推定)、書くな(命令)、書かず(否定)、書きたまふ(尊崇)、書きき、書きつ、書きたり、書かん(以上時)など云ふ詞の線を附したるもの、如し、命令は、見よ、捨てよ、の如く常にはよの助動詞を添ふることなるが、四段活と奈行變格の動詞は既然言を以て直ちに命令詞となす格にて、右の書くと云ふ動詞は四段活なるを以て別に助動詞なく書けと云ひて直ちに命令とはなるなり。

一一〇 助動詞の活用は如何

答 助動詞は普通は動詞形容詞と等しく活用し、將然、連用、終止、連體、既然の五轉あれど、希には活用せざるものもあり、唯動詞と異なる點は、主として動詞に付きて其活動を助くると、種類によりて受辭に繰くさまの一樣ならざることなり。

一一一 助動詞の性質に就て種別を擧げよ

答 助動詞の性質は、能動、受動、役動、役被動、崇敬、否定、斷定、推量、希望、命令、禁止、感動、對比、時、等に別つを得べし、

一一二 助動詞活用の例を示せ

答 助動詞活用の例は左の如し、或轉には活用すべき詞なきものもあり。

將然言	續用言	終止言	續體言	既然言
る	れ	る	るゝ	るれ
さす	させ	さす	さする	さすれ
せられ	せられ	せられ	せらるゝ	せらるれ
ず	ず	ず	ぬ	ね
けむ		けむ	けむ	けめ
ごとし	ごとく	ごとし	ごとき	

一一三 助動詞の能動、役動、被役動を說明し且例を擧げよ

答 能動とは或動作を我力にてなし得る能力ある意を表はすものにて、例へば「我は一日十里ばかりの道は行かる」、「我にても爲し得らるゝならむ」のる、らるゝの如く役動は他者に爲さしむる意を表はすものにして「下男に松を植ゑしむ」、「人に物を書かず」のしむ、ずの如く、被役動は、他者より爲さしめらるゝものにして「木を植ゑしめらる」、「物を書かせらる」のしめらる、せらるの如し。

一一四 助動詞の否定、斷定、推量、希望の實例を問ふ

答 否定は「花が咲かず」、「雨はふるまじ」のず、まじの如く、斷定は「これは書物な

り」、「必らず事を行ふべし」のなり、べしの如く、推量は「花やさくらむ」、「秋立つらし」のらむ、らしの如く、希望は「明日御來駕ありたし」などの場合のたしの如し。

一一五　助動詞の時を問ふ

答　文法上時とは過去、現在、未來の三種なれども、是動詞助動詞を通じて見たる上にての區別にて、單に助動詞のみに就て云はゞ現在を表はすべきものなし、現在を表はす場合には動詞を其儘用ひ、「人歩む」、「鳥啼く」などゝ云ふなり、されば助動詞には過去と未來の區別ありて、過去は「彼れは英雄なりき」、「我は書を讀みつ」、「風は吹きぬ」、「雨はふりたり」のき、つ、ぬ、たり等の如きものにて、又未來は「明日學校に行かむ」、「花觀に行かまし」などのむ、ましの類なり。

一一六　對比の助動詞を問ふ

答　對比の助動詞とは或物と他の物と類似せる意を表はすものにて、例へば「歳月は流るゝごとし」、「金輩のごときは斷じて爲さゞるなり」、「斯のごとく云々」などの場合に於けるごとし、ごとき、ごとくの如し。

一一七　單助動詞、合助動詞の別を問ふ

答　助動詞の構造に單獨なると、二個以上連續せるとあり、前者はる、らる、す、さす、しむ、たり、べしの類、後者はせらる、させらる、たりけり、られき、しめられたりき、なりき、なるまじ、なりけんの類なり。

第十章　副詞

一一八　副詞とは如何

答　副詞とは動詞、形容詞、又は他の副詞に添ひ、其意味を種々に形容修飾する詞にして、例へば、「早く歩め」、「甚だ高し」、「只管思ひ煩ふ」、「いと遙かに見ゆ」の早く、甚だ、只管、いと、遙かには皆副詞なり。

一一九　副詞の種類を示し、各二三づゝの例を擧げよ

答　副詞を分ちて本來の副詞、轉來の副詞の二種とす、前者は始めより副詞たるものにして、例へば、唯、甚だ、專ら、必らず、皆、速に、愈、畢竟、到底、再三、しばく、そよく、などの如く、後者は他の品詞の轉じて副詞となれるものにて、例へば「遠く聞ゆ」、「日々勉强す」、「絶えず敵の動靜を伺へり」、などの遠く、日々、絶えずなどの如し。

一二〇　副詞は如何なる品詞より轉來することあるか

答　轉來の副詞は名詞、形容詞、動詞より轉來す。

一二一　名詞、代名詞より轉來せる副詞の實例を擧げよ

答　「今、月明らかなり」、「昔、男ありけり」、「日々通學す」、「明年歸鄕せん」、「一朝事あらば劍を執つて起たん」などの縱線を附したるもの是なり。又「常に家に在り」、「時に一笑す」、などの常に時にの如きは名詞の下ににの添ひて副詞となれるものなり。

一二二　形容詞より轉來せる副詞の例を擧げよ

答　「水清く流る」、「鳥の音遠く聞ゆ」、「あまねく捜しもとむ」、「善く記憶す」、等の線を付したる部分、其他早く、久しく、少しく、全く、同じく等皆形容詞より轉來せるものなり。

一二三　動詞より轉來せる副詞の例を擧げよ

答　「たとへ如何なる難事たりとも……」、「たえず敵の動靜を伺がふ」のたとへ、たえずの如きものなり、又ますく、みるく、返すがなどは動詞を重ねて副詞となせるものにて、是又動詞より轉來せりといふべきものなり。

一二四　左に擧げたる副詞の中本來のものと轉來の

ものゝを區別し轉來のものは如何なる品詞より轉せるかを示せ

(1)いろ〳〵　(2)前に　(3)朝夕に　(4)ちかごろ　(5)日頃　(6)ひさびさ　(7)よく〳〵　(8)年月に　(9)そこに　(10)思ふに　(11)いづれに　(12)恐らくは　(13)斷然　(14)蓋し　(15)速に　(17)はら〳〵と　(18)とりどり　(19)所々に　(20)國々に　(21)暫く　(22)猶　(23)おほむね

答　(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)(11)(12)(17)(18)(19)(20)(23)はいづれも轉來の副詞にして、自餘の(13)(14)(15)(16)(21)(22)は本來の副詞なり、又轉來のものゝ(1)は名詞を反覆したるもの(2)は名詞ににの副ひたるもの(3)は合名詞ににの副ひたるもの(4)(5)は合名詞の其儘副詞となりたるもの(6)は形容詞の語根を反覆したるもの(7)形容詞の轉じて副詞となりたるものを更に反覆したるもの(8)は合名詞ににの添ひたるもの(9)は代名詞ににの添ひたるもの(10)は動詞にテニヲハの添ひたるもの(11)は代名詞ににの添ひたるもの(12)は動詞にテニヲハの副ひたるもの(17)擬音を模擬したる語にとの添ひたるもの(18)は動詞を反覆したるもの(19)(20)は名詞を反覆したるものにの添ひたるもの(23)は合名詞の副詞となりたるもの。

第十一章　接續詞

一二五　接續詞とは如何

答　接續詞とは言語と言語との間或は句と句との間、或は文章と文章との間を續くる言語にして「鳥或は獸」「書を讀み且字を習ふ」「之を求めたるたるか抑も之を與へたるか」、「春になりぬされど花はいまだ開かず」などの中線を付したるは皆續接詞なり。

一二六　接續詞の種類及其實例を問ふ

答　接續詞を大別して本來の接續詞、轉來の接續詞の二種とす、本來の接續詞とは始めよりの接續詞にして他の詞の轉じたるものに非ざるものを云ふ、例へば、將た、且つ、則ち、即ち、扨て、但し、尤も等の如き是なり、又轉來の接續詞とは、他の詞の轉じて接續詞となりたるものにて、例へば、然ちば、然るに、されども、並びに、及び、さて、そも〳〵、是に於て、などは轉來の接續詞にして、是等は皆動詞、副詞、代名詞等の下に他の詞の添ひてなりたるものなり。

第十二章　感動詞

一二七　感動詞とは如何

答　感動詞（一に感歎詞）とは、吾人の喜怒哀樂等凡べて人情感動する所より發する聲にして、例へば「あゝ、悲しいかな」、「あら無殘の事や」、「あはれ今年の秋もいぬめり」、「あな苦し」などの線を付したるもの、如き是なり。

一二八　感動詞の種類及び其實例を擧げよ

答　感動詞には單獨に用ひらるゝものと、他語に副へて用ひらるゝものとあり、前者を獨立的感動詞と呼び、後者を附屬的感動詞と呼ぶ、獨立的感動詞は單獨にて賞讃、恐怖等其他の感動の意を表はすものにてこれは概して他語の上に置かる、例へば「あら、悲し」、「あな、羨し」「やよ、まてしばし」「いで、御消息聞えん」「いざ、行かん」「すは、事こそ起りたれ」の如きもの、又附屬的感動詞とは、單獨にては其意通ぜず、名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、テニヲハ、副詞、接續詞等に附屬して始めて感動の意を表はすものにして、例へば「悲しいかな」、「忘れじな」、「うらめしの世や」、などの類是なり。

第十三章　テニヲハ

一二九　テニヲハとは如何

答　テニヲハは後詞、後置詞等とも云ひ、助辭中の一種にして、地の言語の中間にありて上下の語を連接し其意味を續くるものにて、例へば「秋風の吹く」、「紙に字を書く」などのの、に、をの如く「又君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで」の歌にて線を付したるもの孰れもテニヲハなり。

一三〇　テニヲハの他語に連續する規定は如何

答　規定あるものとなきものとありて一定せざれど、凡て三種に別つを得べし、即ち第一種は名詞又は代名詞の下にのみ連續するもの、第二種は動詞形容詞の下にのみ連續するもの、第三種は諸種の詞の下に連續するもの是なり。

一三一　三種に屬するテニヲハの例を擧げよ

答　第一種即ち名詞代名詞の下にのみ付くものは、が、の、に、を、と、へ、より、から、まで等にして、第二種即ち動詞形容詞の下にのみ連續するものは、て、で、ば

つゝ、ながら、まゝ、まゝに、なべに、からに、と、ども、が、に、を、ものゝ、ものから、ものゆゑ等のもの、又第三種即はち諸種の詞の下に續くものは、は、も、ぞ、しなん、こそ、だに、すら、さへ、のみ、ばかり、や、か等なり。

一三二 が、の、に、を、と、へ、より、から等のテニヲハの實例を示せ

答 がは「雨が降る」、「斯くと誰が云ふ」、「君が代」、「見るがうちに」、「善きが多し」、「悲しきが中にも……」

のは「雨の降るヨ」「しばしの間」「詩歌などの事」「恨めしの世」

には「病に懼る」「人に逢ふ」「月にむら雲」「山に棲む」

をは「花を觀る」「義を守る」「門前を過ぐ」「故郷を思ふ」

とは「何と云ひけん」「これと定む」「世と推し移る」「雪と降る」

へは「前へ進む」「都へ上る」「左へ廻る」

よりは「天より落つ」「此れより彼れがよし」「彼方より來る」

からは「天から落つ」「長崎から來れり」「始めから終りまで」

一三三 へとにとは如何なる區別あるか

答 へは方向を示すテニヲハにてには地位を示すテニヲハなり、例へば甲地に居りて乙地を指してはへと云ひ、其地に到り又其處に位置を定めたる時はにと云ふ「東京へ行かん」「大阪に棲みて」の如し。

一三四 ば、つゝ、がてらのテニヲハの實例を示せ

答 ばは「月見れば」「書を讀まば」「何事のあればにや」

つゝは「見つゝ行く」「讀みつゝ書く」

がてらは「月見がてら夕涼みす」

一三五 は、も、ぞ、なん、だに等のテニヲハの實例を示せ

答 はは「柳は緑花は紅なり」「時雨は降りぬ」「寒くはあれど」「樂しくは思へど」「善きは取り、惡しきは捨つ」

もは「我も行き人も行く」「可もなく不可もなし」

ぞは「花ぞ散る」「鹿ぞ鳴くなる」「今日は最樂しき日なるぞ」

なんは「母なん藤原氏なりける」「かくなんある」

だには「深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり」

一三六　だのテニヲハに幾種あるか實例を擧げて答へよ

答　三種あり一は事物を指示する意のぞ、二は問ひ掛くる時のぞ、三は係辭のぞなり、指示するぞは「名にめでてをれるばかりぞ女郎花我れおちにきと人に語るな」「斯くあるべき事ぞかし」などの場合のだにて、問ひ掛くるぞは「何事なるぞ」、「いづこへ行くぞ」の場合の如く必ず上に疑詞をいたゞくなり、係辭のぞは「雪ぞ降る」の如し

一三七　さへ、すら、だにの區別を問ふ

答　さへは一つ物事のある上に又他の物事の副はり行く場合に用ひ、だにとすらは双方とも粗同意にて事物の輕き意を擧げて言外に其餘の重き意をひゞかするやうの時に用ふ、例をあぐれば

さへは「あづさ弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜摘みてむ」「父に別れて程もなきに又母にさへ別れ……」

だには「さらぬだに淋しきは山里のならひなるを秋となりては一しほものがなしくなりぬ」

すらは「かばかりの小事をすらなし得ぬ者が如何ぞ大事業を企て得べき」「大人すら能はず況んや小兒をや」

だに、すらは多くの場合に同じやうの意味にてはあれど、だには多きものゝ中にてせめて少しにてもとやうに願ひ求むる意の場合に用ふることあれどすらにはさることなし、例へば「小事すら成し得ず況んや大事をや」のすらをだにに換ふるも同じことなれど、「散る花の忘れがたみの峰の雲そをだに殘せ春の山風」のだにをすらに換へては意義とゝのはず。此題の場合の如きだにはせめてはそれにてもと希ふやうの意あるなり。

一三八　のみとばかりの區別を問ふ

答　のみは一ありて二なき意を表はす詞にて例へば「人は皆歸りて我のみ殘れり」、「平素家にのみ居て……」の類なり、ばかりものみと粗同意味に用ふる場合あり例へば「名ばかりにて實は擧らず」などの類なり、されど又程といふ意味にも用ふ、即ち「大藏卿ばかり耳敏き人はなし、蚊の眉毛の落つるほども聞きつけ」などの場合是なり。

一三九　からとものからとの區別を問ふ

答　からは故にとか或はによりての意、ものからはものながらの意にして兩者いたく意味異なれり、「うきて行く紅葉の色のこきからに川さへ深く見な渡るかな」「郭公ながなく里の數多あれば猶うとまれぬ、思ふものから」の例によりて其差を云ふべし。

第十四章　熟語

一四〇　接頭語とは如何

答　接頭語とは他の語の頭につきて熟語を作り始めて其用をなし、單獨にては効を爲さゞるものを云ひ、例へば、さ夜中　み空　か弱し　を山田　うち出る　おし隱す　もてあそすなどの語中線を附したるが如きものなり。

一四一　接尾語とは如何

答　接尾語とは他の語の尾につきて熟語を作り始めて其用をなし、單獨にては効を爲さゞるものを云ひ、例へば　汝ら　女ども　奴ばら　友どち　寒げ　深さ　行くへ　人一り　大刀二ふり　鳥一羽　果實三個　歌一首　家五軒　路十里　時めく　利口ぶる　花やぐ　夜もすがら等の線を付したるものゝ如き是なり。

一四二　接頭語及接尾語は品詞なりや

答　否、品詞とは文中に獨立して其地位を占め得るものにて、名詞、代名詞、動詞、形

容詞、副詞、接續詞、テニヲハは皆品詞なれども、接頭語接尾語に至りては、他語に添ふに非ずんば文中に用ひられざるが故に品詞に非ず、但し他語と接續して一熟語を形造りたる場合は其熟語は一品詞となるなり、例へば「さ夜中」と云はゞ一名詞(品詞)なれどもさの一語のみを引離しては其さを品詞と呼ぶべからず。

一四三　接尾語が他語に接する關係を問ふ

答　接尾語が他語に接して一熟語となる場合には、或は名詞となり、或は形容詞となり、或は動詞となり、或は副詞となる、各規律ありて亂るべからず。

一四四　他語に接して名詞となる接尾語の例を擧げよ

答　我ら　男ども　大人だち　友どち　遠さ　深さ　深み　重み　などの類。

一四五　他語に接して動詞となる接尾語の例を擧げよ

答　時めく　今めく　嬉しがる　大人ぶる　學者ぶる　などの類

一四六　他語に接して形容詞となる接尾語の例を擧げよ

答 をしがましし　めでたし　男らし　學者らし　などの類

一四七 他語に接して副詞となる接尾語の例を擧げよ

答 歸りがてに　過きがてに　途すがら　夜すがら　人ごとに　一時間ごとに　三つづゝ　本など　の類。

一四八 熟語とは如何例を擧げて說明せよ

答 熟語とは二語以上の複合より成れる品詞なり、換言すれば數語の合して一語となりて一義を成すものなり、例へば「谷川」、「牝馬」、「一年」、「天津風」、「豐葦原中津國」、「上下」、「兄弟」、「かゝり見る」、「うすくらし」、「みづから」、「やゝもすれば」、「要するに」、「なかんづく」の類是なり。

一四九 疊語とは如何例を擧げて答へよ

答 疊語とは熟語中にて、其構造せる語の同一なるものを稱す、換言すれば同語を重用せる熟語なり、例へば「山々」、「種々」、「度々」、「めゝし」、「いまゝし」、「ますます」、「絶えゝに」、「あはれゝ」、「くりかへしゝ」の類是なり。

一五〇 熟語には如何なる種類あるか

答 熟語には名詞、動詞、形容詞、副詞、接續詞等あり、各一種づゝの例を擧ぐれば、淺顯(名詞)與す(動詞)こゝろよゝ(形容詞)思ふに(副詞)かるが故に(接續詞)是なり。

一五一 熟語の名詞の種類を擧げよ

答 熟語の名詞中、下の語が主となり、上の語は其從となり上のは下のを形容修飾する關係なるものあり「牝馬」、「天つ風」、「瓦斯織」等の如し、又上下二語とも輕重なきものあり「端近」、「請取」、「賣捌」の類或は「天地」、「日月」、「山川」、「親子」、「遠近」の如し、又句の熟語となりて名詞と同じく用ひらるゝものあり「未曾有」、「傍若無人」、「不可思議」等の如し。

一五二 熟語の動詞を擧げよ

答 「罪す」、「吟ず」、「興す」、「組す」、「心指す」(志)、「落入る」(陷)、「かゝり見る」(顧)、「うちつれだちゆゝ」、「大殿じもる」などの如し

一五三 熟語の形容詞を擧げよ

答　「心好し」(快)「ものうし」(慵)「細長し」「愛らし」「嬉陶し」などの類

一五四　熟語の副詞を擧げよ

答　「おそらくは」「こひねがはくは」「おもんみるに」(思ひ見るに)「敢くて」「元より」「みづから」(身づから)「いはむや」(況)「欲しいまゝに」(恣)等の如し。

一五五　疊語の種類及効用を問ふ

答　疊語には名詞の疊語、代名詞の疊語、動詞の疊語、其他形容詞、副詞、感歎詞等それ〳〵疊語ありて、其用法異なる所あり、中に就て動詞、形容詞、副詞、感歎詞の疊語は意を強むる効あり、各詞の疊語は多くは事物の數多き意を表はす。

一五六　名詞及代名詞の疊語を擧げよ

答　「山々」「津々」「島々」「人々」「我々」「種々」「戸々」「月々」「度々」「年々」の類

一五七　形容詞の疊語を擧げよ

答　「長々し」「重々し」「輕々し」「遠々し」「事々し」「女々し」「なれ〳〵し」「うひうひし」「いま〳〵し」「〳〵だ〳〵し」「おどろ〳〵し」

一五八　副詞の疊語を擧げよ

答　「行く〳〵」「代る〳〵」「いと〳〵」「たえ〳〵に」「あり〳〵と」「靑々と」「さめく〳〵と」「こと〳〵く〳〵」「しらず〳〵」の類

一五九　感動詞の疊語を擧げよ

答　「あゝ」「あはれ〳〵」「いで〳〵」「いざ〳〵」「やあ〳〵」

第十五章　文　章

一六〇　文の職能的成分を問ふ

答　文の職能的成分は、主語、客語、説明語、修飾語の四種にも分解し或は主部、客部、説明部の三種にも分つ。

一六一　主語とは如何

答　主語とは其文章の叙述せる思想の主題となるものにて、例へば「花散る」「雪降る」「農夫稲を刈る」と云ふ文章に就て、線を付したる部分は各其文章の主語なり。

一六二　文の説明語とは如何

答　説明語とは文の主題たる主語の動作狀態等を述ぶる語にして、「花散る」「雪降る」「農夫稲を刈る」と云ふ文章に就て、線を付したる部分は各其文の説明語なり。

普通の場合に於て説明語は主語の下にあるなり。

一六三　文の客語とは如何

答　最單純なる文は唯一の主語と唯一の説明語とより成ること「花散る」「雪降る」の如くなれど、他に客語と稱ふる一成分を有するものもあり、客語とは主語に表せる事物の動作狀態等の關係せる事物を表はせる語を云ふ、例へば

農夫稲を刈る

教師生徒に書を教ふ

父母の恩は山よりも高く海よりも深し

等の文に於て線を付したる部分は孰れも客語なり。客語は普通には主語と説明語の中間に在り。

一六四　修飾語とは如何

答　修飾語とは文の主語、客語、説明語を修飾し種々に意義を變化せしむる爲めに添加する語にして、例へば

數多の農夫熟したる稲を悉く刈る

といふ文に於て、線を付したるは皆修飾語にて、數多のは主語の修飾語、熟したるは客語の修飾語、悉くは説明語の修飾語なり、修飾語は主語客語説明語のみならず他の修飾語をも修飾す、されど茲に修飾といふは彼の美辭を連ねて文を飾る修辭上に所謂修飾の意にはあらず、只何にても云ひ添ふる詞なり。

一六五　主語客語說明語修飾語は如何なる單詞より成るか

答　主語と客語とは名詞代名詞より成り、說明語は動詞形容詞助動詞より成り、又修飾語は主語客語に付くものは、動詞形容詞助動詞の連體の意を成し說明語に付くものは副詞の意をなす。

一六六　左の文章に就て主語說明語を指示せよ

(1)水は方圓の器に從がふ　(2)君君たり、臣臣たり

(3)柿本人麿は我國の歌聖なり

答　(1)にては水が主語にして從がふが說明語、(2)にては上の君上の臣が各主語にして、たり、たりは皆說明語、(3)にては柿本人麿が主語にしてなりが說明語なり、

一六七　左の文章に就て客語修飾語を指示せよ

(1)柿本人麿は我國の歌聖なり　(2)鳥天を早くかける　(3)人たらんものは道を行はざるべからず

答　(1)にては歌聖が客語、我國のが其客語の修飾語、(2)にては天が客語にして早くがかけるといふ說明語の修飾語、(3)にては人たらんがものなる主語の修飾語にて

道が客語なり。

一六八　主部客部說明部とは如何なる區別なるか

答　主語と其修飾語とを合せて主部といひ、客語と其修飾語とも合せて客部といひ、說明語と其修飾語とを合せて說明部と云ふ、若し修飾語なき場合は直ちに其主語客語說明語を主部客部說明部と云ふ。例へば

數多の農夫　熟したる稻を　悉く刈る

と云ふ文にて單線を付したるは主部、複線を付したるは客部三重線を付したるは說明部なり。

一六九　主語說明語の略せらるゝ場合を問ふ

答　主語說明語は之なくとも意味の明らかなるときは省かるゝこと往々にしてあり、例へば土佐日記に『斯くて字多の松原を行き過ぐ、その松の數幾そばく、幾千年歷たりと知らず』

とある文の如き、始めの「かくて」の下、末の「歷たりと」の下に各我等といふ主語が省かれ、又「幾そばく」の下にはあらむといふ說明語が省かれたるの類なり。

一七〇　左の文に於て線を付したる詞は何部に屬するか

花も盛となれば散る又月も滿つればかゞ
志堅し且堅遠し

答　斯の如く終止したる二文節の間に入りて双方を連續する接續詞は主部客部説明部の孰れにも屬せず。

一七一　左の文に於て線を付したる詞は何部に屬するか

あはれ、今年の秋もいぬめり
あはや、法皇の流されさせおはしますぞや

答　句又は文の全部に係る感歎詞は主部客部説明部の孰れにも屬せざるものなり、右の文中線を付したる三語は卽ち其例にて是等皆何部にも屬せず。

一七二　句及節を問ふ

句とは二個以上の單語の集合にして未だ完全なる思想を表はすに至らざるものにて例へば

友呼ぶ鳩　いとめづらしき話　朝早く起くるはよき事なり

等の線を付したる部分の如きものを云ひ、節とは文の意義形式の上に於て獨立せざるものを云ふ例へば

志堅く、堅遠し

花も盛となれば散り、月も滿つればかゞ

の線を付したる部分の如し、若し主が終止言にて終り、志堅し、花も盛となれば散るとは〻意義形式とも獨立の文となれども、然らざる故に獨立とはならず。

第十六章　聯構文

一七三　聯講文とは何ぞ

答　二個以上の文を聯續して一文を構成したるものを聯構文と云ふ、例へば左の如きは皆聯構文なり

志堅く、望遠し。　花咲き、鳥啼く。　兄は詩を作り、弟は畫を描く。

水至つて清ければ、大魚棲まず。　君、君たれども、臣、臣たらず。

一七四　聯構文は如何にして作らるべきか

答　二個の文を聯構せしめんには、上なる文の説明語の末を連用段とする、或はテニヲハを添へて文を變して節となし下の文と聯續せしむるなり。

一七五　挿入文とは何ぞ例を示せ

答　挿入文とは一文中に他の文を挿み入るゝものにて、其挿入の文は一の獨立の文と見なすべし、今左に挿入文の例を擧げんに

彼れの云ふ所は、損益は鬼に角に、理にはかなへり

今日わかれあすはあふみと思へども、夜やふけぬらん、袖のつゆけき

外より來る者などぞ、殿はいかにかならせたまへるなど問ふ

一七七　倒置句とは如何なるものを云ふか

答　修辭上諸種の必要の爲めに、主語、説明語、客語、修飾語等の尋常なる位置を顚倒して用ふることを云ふ、例へば

しかず、世を捨てゝ山に入らんにはしかず　（世を捨てゝ山に入らんにはしかず）

圖らざりき、今日君に逢はんとは　（今日君に逢はんとは圖らざりき）

の如き皆尋常ならば括弧内に記せる如く記す所なれど文意を強めん爲めに顚倒せるなり

倒置句の例は和歌には殊に多し、

とめ來かし、梅盛なる我宿を、うときも人は折にこそよれ

心あらん人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を

わだの原八十島かけて漕ぎ出ぬと、人にはつげよあまのつりふね

なと皆倒置句なり、又「訪へかし、人の、花のさかりを」「見せばや、人に、夜のけしきを」の如きは三段に倒置せり、尋常ならば「花のさかりを人の訪へかし」「夜のけしきを人に見せばや」といふべきところなり。

一七八　引用句とは如何なるものぞ例を擧げて示せ

答　引用句とは文中に古人の有名なる句を引き入るゝことにて、修辭上の必要上よりすることなり、これは古人の句の一部分をのみ引き入れて其句全體の意味を言外に傳ふる等其他種々の効用あり、引用句の例を擧ぐれば

……此そうしは目に見えぬ心に思ふことを人やは見んずると思ひてつれ〴〵なる里居の程に書きあつめたるを、あいな〳〵人のためにびんなきいひすぐしなどしつべきところ〴〵もあれば、きようかくし置きたりと思ひしを、涙せきあへずこそなりにけれ云々（枕草子の跋）

と云ふ文にて、線を施したる部分の如き即ち是なり、こは古今集に「枕よりまた知る人もなき戀を涙せきあへずもらしつるかな」と云ふ歌あるを、其第四の句を引用して、實は下のもらしたりとの意を讀者に傳へたるにて文を婉曲ならしめたるなり、即ち上の文の線を付したる前後の意は、きよう隱し置きたりと思ひしものが、人にもらすことゝなりたりとの意味に外ならず、讀者が若し引用句と云ふことは氣づかざるか又は其古歌を知らざりし場合は文の意通ぜざるなり、されば引用句は最著明なる古人の作より引くべきものなり、歌にも引用句多し例へば

おもかげの霞める月ぞ宿りける春やむかしの袖のなみだに（新古今）

の線を付したる處は、古今集の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつは元の身にして」とある歌の句を取り入れて其歌全體の意をひゞかせたるものなり。

一七九　省略法を問ふ例を擧げて答へよ

答　修辭上の或必要より文章中の或部分を省略することにて、實は日常の文に多く見ゆる例なり、或は名詞を省き、或は動詞を省き、其他設明語、テニヲハ等を省くことあり、例へば

尊き（人）も卑き（人）も老い（たる人）も若き（人）も花の下にうかれ遊べり

蒲田の梅は咲きたるが杉田の（梅）はまだ（咲かぬ）なり

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りて（後に知らるゝ）なり鳬

などの文や歌の中にて（　）内に記せる詞は略せらるゝなり。又テニヲハの略せらるゝは韻文には殊に多し、例へば

櫻花（を）折りてかざして家づどにせん

月影の傾く（を）見れば夜はふけにけん

時鳥一聲なきて（に）いつち（に）行きけん

などの括弧内の詞は略せらるゝが常也、是韻文としての修辭上の必要より來る也

一八〇　懸詞とは何ぞ例を擧げて答へよ

答　懸詞とは同音(又は類音)異義なる二つの語を一語にて兼用することにて、是亦主として文を婉轉流麗ならしめんとする修辭上の工夫にして、散文よりは韻文には殊に多し、例へば左の如し。

「……瀬多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ(逢、近江)路や、世をう(憂)ねの野に鳴くたづも……いつかは我身のをはり(終、尾張)なる、熱田の八劍ふし拜み、汝干に今やなるみ(成、鳴海)かた、傾く月に迎見ねて……」

一八一　枕詞とは如何

答　枕詞は修飾語の一種と見るべく、名詞、動詞、副詞等の上につきて、修辭上の一方便として用ひられ、主として文の句調を圓滑ならしむる効あり、是もまた散文よりは韻文に殊に多し、枕詞は古代の用語にして今日にては某の枕詞は某の語に用ふとゝふ一定の規律となりをりて漫りにすべからず、之を付すると否とは文の意味の上には何等の輕重を成さゞれども調の上には差違を來す、多くは五言なれども希には四言なるもあり、其數數百に上るゝ雖、今日普通に用ひらるゝものはさまで多からず、中に就て殊に多く用ひらるゝは

あしびきの「山」　ひさかたの「天」　あらたまの「年」
すがのねの「長き」　あづさゆみ「引く」

などの類ひなり、此内ひさかたのの如きは、元は天(アメ)の枕詞なりしをそれより轉じて雲、空などの字にも冠し、あづさゆみは、ひくにもはるにも冠するたゞひ多し、あづさゆみをひく、はるなどの詞に冠するは梓弓はひきもはりもするものなればにて意味明らかなれど、多き枕詞の中には意義不明のものも少からず、古來學者間に種々の説を付するものあり、元の意義はともあれ、普通には單に某の枕詞は某の語に冠することゝ記憶して可ならん、四音の枕詞はそらみつ「大和」　しらぬひ「筑紫」の類なり、

一八二　序詞とは如何

答　序詞とは下の言語句を言ひ出でんが爲めに上に添ふる言語にて、其下の緣ある或語に關係する外他の部分には意味に於て何等の關係もなきこと枕詞に同じ、唯序詞には枕詞よりも長きが多く、又枕詞の如く必らずしも形の定まりなし、例へば左の如し

あまのたく縄くりかへし云々
忍ぶのくさの忍ばざらめや
ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草あやめもわかぬ戀もするかな

第十七章　係結法

一八三　係結法とは如何

答　係結法とは一句、一文の中に用ひられたる或テニヲハと其文の末の詞と相關係して始終を成すことを云ひ、而して其テニヲハを係詞と呼び之に應じて末を結べる詞を結詞と云ふ、例へば「花は散りぬ」「花ぞ散りぬる」「花こそ散りぬれ」といふ文に於て云はば、單線を付したる上なるが係詞にて下なるが結詞なり。

一八四　係結法の種類を擧げよ

答　係結法には三種あり、第一段の係結法、第二段の係結法、第三段の係結法是なり、或は此一を尋常の係結法、二を、ぞ、なん、や、か、の係結法、三を、こその係結法とも稱す。

一八五　三種の係結法に就て各其係詞を擧げよ

答　第一段の係詞は
は　に　を　も　の　が　徒（此徒は何の係詞もなき場合を云ふ）

第二段の係詞は
ぞ　なん　や　か
第三段の係詞は
こそ

一八六　三種の係結法の結詞には如何なる規則あるか

答　第一段係結法は終止言又は感動詞にて結び、第二段係結法は連體言にて結び、又第三段係結法は既然言にて結ぶ定めなり。

一八七　第一段係結法を說明し且其例を擧げよ

答　其文の主語に、は、に、も、を、が等のテニヲハ（卽ち茲には係詞と呼ぶ）の孰れかが付く時か、或は更に如何なるテニヲハも付かざる場合は、是等の係に應じて末を動詞、形容詞、助動詞等の終止言、若しくは感動詞を以て結ぶことを云ふ、例へば左の如し

水は流る　山に櫻あり　竹内宿禰を大臣とす
鳥が鳴く　月もやどらず　雨ふりいでぬ
風吹きそめけり　散りゆく花もおもしろきかな　月が入りたり

一八八　第二段係結法を説明し且其例を擧げよ

答　文の主語客語等其他諸種の上なる詞に、ぞ、なん、や、か、等のテニヲハの付きたる時に、是等の係に應じて末を動詞、形容詞、助動詞の連體言を以て結ぶことを第二段の係結法と云ふ、其例左の如し

過ぎし昔ぞなつかしき　雪ぞ積れる　音ぞやぬ
母なん藤原氏なりける　世をや恨むる
峰の櫻は今か散るらん

一八九　第三段係結法を説明し且例を擧げよ

答　文の主語客語等其他上なる諸種の詞に、こそのテニヲハの付きたる場合に、其係りに應じて、末を動詞、形容詞、助動詞の既然言を以て結ぶを第三段の係結法と云ふ、其例左の如し。

人ころ　しらねかはく問もなし　名こそながれて猶聞えけれ
枕にこそはしはべらめ　歸りこそせね
跡もなくこそかき消えてうせにしか
世をこそへたれ

一九〇　三種の係詞の中が交互に重りたる場合は結詞は如何にすべきか

答　三種の係結に就て、第三段の係が最重く、第一段の係は最輕し、第一段の係詞は同段内の係詞又は第二段か第三段かの係詞と重ぬることあり、されど第二段は第二段又は第三段と重ることなく、第三段は第三段又は第二段と重ることあるべからざる定めなり、第一段の係詞が他の或係詞と重る場合は、同段のものと重らば主は第一段の結詞一つを以て結び、第二段のものと重ならば第二段の結詞を以て結び、第三段と重ならば第三段の結詞を以て結ぶ規定なり、例せば左の如し

宮中には今日も花觀の宴を開かる　（一段と一段）
院中の禮などいふこともこれよりぞ定まりける（一段と二段）
此人も君子とやいふべき　（一段と二段）
淺き瀨にこそあだ波は立て　（三段と一段）
雪とのみこそ花は散るらめ　（三段と一段）

一九一　左の例に於て係結の關係を示せ

しの、めにあかで別れしたもとをぞつゆやわけしと人のとがむる

花をこそ人や折るとてとがめしか數ならぬ身をいかにかはせん
影こはる宿夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかけける

答 三首の歌とも一首の中に二種の係詞が重りたるやうに見ゆれども、これは他の係結の間へ又別の係結が夾まりたるにて、第八問の答中に擧げたる例とは種類異なり、此種のものは係詞も結詞も二つづゝあるべきものにて、各係結それ〳〵獨立し居りて、決して係詞が重りたるにはあらず、左に係結の關係を示さん

しのゝめにあかで別れしたもとをぞつゆやわけしと人のとがむる
花をこそ人や折るとてとがめしか數ならぬ身をいかにかはせん
影こはる宿夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかりける

複線を付したるは單線を付したるとはそれ〳〵獨立の係結の關係を示せるなり。

一九二 左の詞（動詞形容詞）が係詞の種類によりて語尾を變ずる狀を示せ

打つ	亂る	第一段の結	着る	來	第三段の結
死ぬ	善し	第二段の結	流る	起く	す（爲）
				見る	

答 答左の如し

打つ	亂る	第一段の結	打て	亂れ	第三段の結
亂る、	着る	第二段の結	亂れ	着れ	第三段の結
着る	く（來）	第一段の結	着れ	來れ	第三段の結
來る	す（爲）	第一段の結	する	すれ	第三段の結
死ぬる	死ぬ	第二段の結	死ぬれ	死ぬれ	第三段の結
善き	善し	第二段の結	善けれ	善けれ	第三段の結
流るゝ	流る	第一段の結	流るれ	流るれ	第三段の結
見る	見る	第一段の結	見れ	見れ	第三段の結

一九三 左の助動詞が係詞の種類によりて語尾を變ずる狀を示せ

ず	まじ	べし	ず	まじ	べし
ぬ	まじき	ぬ	ね	まじけれ	ね

答 左の如し

ず	まじ	べし	ず	まじ	べし
ぬ	まじき	ぬ	ね	まじけれ	ね
む	つ	ぬ	む	つ	ぬ

べし　べき　べけれ
らむ　らむ　らめ
つ　つる　つれ
らし　らし　らし

一九四　係詞のみありて結詞なき例を問ふ

答　結詞なくても可なる例は、係詞にて文句を終結とし、其結詞は言外にひゞかせて省略する場合、體言にて（多くは繫け詞の）末を終結する場合等に限ることにて、例左の如し、

（1）いく度説き聞かせても悟らぬは彼の人天性愚かなるにや
（2）人と交らんものは誰もかくあらまほしくこそ
（3）彼の罪人は終に獄中にて死にけるとぞ
（4）谷風にとくる氷のひま毎にうち出る波や春のはつ花
（5）これやこのゆくもかへるも別れては知るも知らぬもあふ阪の關
（6）さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟、かたむく月に汝やみつらん

右の中（1）（2）（3）は日常の文に多く見ゆる例にして、末と（1）は「あらん」（2）「あれ」（3）は「いひ傳ふる」などの詞をそれ〳〵言ひ殘して餘韻にひゞかせたるものなり、又

（4）（5）（6）は體言にて末を止めたるにて、中に就て（5）（6）は繫詞なり。

一九五　三種の係結法以外の結詞の例を擧げよ

答　三種の結詞の外に動詞助動詞の禁止、命令、疑問、反動、希望等の種々の格にて末を結ぶことあり例へば

苔の衣よかわきだにせよ　杜字聲のかぎりは我が宿に鳴け
花のさかりを人に見せばや

等の如し、是等は第一段の係詞を結ぶ例なり。

一九六　結詞を接續詞につゞくるは如何なる場合なるか例を示せ

答　聯構文の數文を相聯ぬる場合には、結詞を轉ず其例左の如し

（1）霞こそ立ちかくせども春の夜の月をぞ人は見るべかりける
（2）都人さこそ まつども郭公同し深山の友な忘れそ
（3）かれこれ知る知らぬにくりす、年頃善く具しつる人々なん忘れがたく思ひて……
（4）逢阪は東路さこそ聞きしかど心づくしの關にぞありける

一九七　係結變格の例を擧げよ

答　所謂變格三種係結法の規則に書きたるものなれど、修辭上の或方便として古人のなしたるにて變格として許しあり、されどこは或特殊の場合に限ることにて猥に倣ふべきにあらず、尤其變格として從來普通に許されあるは多くは二段の係詞なくて二段の結詞のみあるものにて、ぬる、なる、ける、せる、るゝ等なり、例左の如し、

くらゐ山あとを尋ねてのぼれども子を思ふ道に猶迷ひぬる

あひにあいてもの思ふころの吾神にたゞる月さへぬるゝかほなる

秋田刈るかり庵をつくり我がをれば衣手さむく露おきにける

秋の夜ははやながづきになりにけりことわりなりやねざめせらるゝ

第十八章　呼應

一九八　呼應とは如何

答　呼應とは上下に意味の互ひに相應ずる詞を用ふること卽ちかけあひにて、係結の法と同じ趣のものなれど、係結はテニヲハに就て云ひ呼應は語の意義の上より云ふ、卽ち呼應とは自他の區別、時の區別、能動受動の區別等の相混ぜざるやうにかけあはすることなり。

一九九　呼應には如何なる種類ありや

答　呼應には、自他の呼應、能動受動の呼應、時の呼應、反語の呼應等を始め、疑問、推量、希望、禁止、等數種の呼應あり、

二〇〇　自他の呼應とは如何例を擧げて說明せよ

答　自他の呼應とは動作存在を言ひ表はすに自己のと他者のと混交錯雜せざるやうに、上に自動詞を用ふれば下にも自動詞を用ひ、上に他動詞を用ふれば下にも他動詞を用ひてかけあはすることなり、例へば

國治り天下平かなり
國を治め天下を平かにす

と云ふ文に於ける如く、自動詞は自動詞、他動詞は他動詞と相應ぜしむるを云ふ、（單線は自動詞、複線は他動詞）若しこれを

國治り天下を平かにす
國を治め天下平かなり

などゝする時は自他の混交して意義の錯雜を來すなり、されど一文中に各個別の事の別の動作等を言ひ表はす場合は自他を混用することあり、例へば「雨晴れなば（　）遊びに行かん」の如し、此文は括弧の處に「我れ」と云ふ詞が畧されたり、

二〇一　能動受動の呼應を説明し例を擧げよ

答　主語が能動の意を表はしたる時は下にも能動の意を表すべき語にて受け、主語が受動の意を表はしたる時は下にも受動の意を表はす語にて受け、能動と受動とを混同せざるやうにすることを云ふ例へば

甲、乙を呼ぶ　　我、盜人を捕ふ
乙、甲に呼ばる　　盜人、我に捕へらる

の如し若しこれを

甲、乙を呼ばる　　我、盜人を捕へらる
乙、甲に呼ぶ　　盜人我に捕ふ

などゝ云はゞ能動と受動と混じて意義調はずなり行くべし。

二〇二　時の呼應とは如何例を擧げて説明せよ

答　時の呼應とは、過去現在、未來を上下かけあはすることにて、上に過去を表はす語を用ひたる時は下にも過去を表はす語を用ひ、上に未來を表はす語を用ひたる時は下にも未來を表はす語を用ふる等のことを云ふ例へば

我今茲にあり　（現在）
我昨日書を讀みき　（過去）
我明日書を讀まん　（未來）

の如し、若しこれを

我今書を讀みき
我昨日茲にあらん
我明日書を讀む

などゝせんには過去、現在、未來混同して意義調はずなりゆくべし。

二〇三　反語の呼應とは如何例を擧げよ

答　上に、や、やは、か、かは等其他反語の意を表はす語を用ひたる時は、下にも亦それに應ずる語を以て受くるを云ふ、例へば左の如し

人にや云ふべき
逢へば名殘の惜しくやはあらぬ
誰れか此世を頼みはつべき
いつかは恨を晴さで置くべき
焉んぞ知らん

二〇四　呼應の規則の中下を打消(否定)の語にて受くべき副詞の例をあげよ

答　をさ〳〵、よも、よに等の副詞は下を必ちず打消の語にて受け又ゆめ、さら〳〵等は下を打消又は禁止の詞にて受くる定めなり例へば

をさ〳〵　劣らず、　をさ〳〵人に後るゝことなし
さることはよもあらじ
よにあらじ　よにあふ坂の關はゆるさじ
ゆめ忘るべからず　ゆめ忘れ給ふな
さら〳〵知らず　さら〳〵に他人に知らせ給ふな

二〇五　左の文どもは何種の呼應の則に從へるものなるか

(1)恐ら〳〵は然らん
(2)あるひはとることもあらん
(3)多分さることもあるべし
(4)思ふにそは誤解ならん

答　(1)(2)は疑ひの呼應なれども名〳〵べし、上に恐ら〳〵は、あるひは等の疑ひの籠りし語ある故に下も然らん、あらん等疑ひの詞を以て受け(3)(4)は推量の呼應にて上に多分、思ふにといふ推量の意を表はす語あるが故に下をもべし、ならんと云ふ疑ひの詞をもて受けたるなり。

二〇六　左の文は何種の呼應の則に從へるか

いづれを善しとすべき　何を書きたる
秋風に初かりがねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ

答　是皆疑ひの呼應の中に入るべし、汎べて上に何を意味する詞（例へば、何、いづれ誰、いかに、などか等）ある時は下は第二段即ちぞ、なん、やかの結にて結ぶ例なり、從來はテニヲハ三種の別を一、はも徒、二、そのや何、三、こそと別ちたりき。

第十九章　雜問

二〇七　左の文章中より普通名詞と固有名詞を區別して擧げよ

（1）源頼朝、蛭が子島より起りて兵を擧げ數度の戰ひに勝利を得て終に天下を併呑するに至れり

（2）楠正成は世にたぐひ希なる忠臣なりしが、朝敵足利尊氏方の軍勢に敗られて湊川に死せり

答　（1）に於ては、源頼朝、蛭が子島の二つが固有名詞、兵、戰ひ、勝利、天下は普通名詞なり、（2）にては楠正成、足利尊氏、湊川が固有名詞にして世、忠臣、朝敵、軍勢は普通名詞なり

二〇八　左の文章中より代名詞を指定し、其如何なる種類に屬せるかを示せ

（1）彼れはその書物をいつ誰に學びけむ

（2）そこにあるは予の書物なり、君のはかしこに在るにあらずや

（3）あれとこれとの中汝はいづれを宜しと思ふか

答　（1）にては彼れは人代名詞の三人稱、そのは事物の指示代名詞の中稱、ひつは時の不定代名詞、調は人の不定代名詞、（2）にては、そこは場所の指示代名詞の中稱、予は人代名詞の一人稱、君は人代名詞の二人稱、かしこは場所の指示代名詞の遠稱、（3）にては、あれは事物の指示代名詞の遠稱、これは事物の指示代名詞の近稱、汝は人代名詞の二人稱、いづれは事物の不定代名詞なり。

二〇九　左の動詞の活用を問ふ

（1）ひさまづく（跪）（2）あざわらふ（冷笑）（3）にる（煮）（4）わゝる（分）（5）たふる（生）（6）かしこまる（畏）（7）おはします（坐）（8）いる（入）（9）うる（得）（10）にする（似）（11）する（爲）（12）あり（有）（13）なす（爲）（14）ある（居）

答　（1）（2）（6）（7）（8）（13）は四段活、（3）（14）は上一段活、（4）（5）は上二段活、（9）（10）は下二段活（11）は佐行變格（12）は良行變格

二一〇　左の文中の形容詞を指定し、且何の活用に屬するかを示せ

（1）樂しき春立ちてより四方のけしきいとのどけし
（2）よわき者を助くるは善き行ひなり、
（3）たゞしき行ひをなして我心も嬉し

答　（1）にては樂しき、のどけし、（2）にてはよわき、善き（3）にてはたゞしき、嬉しが形容詞にて、此中樂しき、たゞしき、嬉しの三つが志久活に屬し、のどけし、よわき、善きの三つは久活なり。

二一一　用言（動詞形容詞）の語根、語尾とは何ぞ

答　語根とは詞の上部即ち變化せざる部分を云ひ、語尾とは詞の下部の種々に變化する部分を云ふ、例へば

思はん　思ふらん　思ひき　思へよ　思へば　思はゞ（動詞）
書かん　書きぬ　書けよ　書けば　書かば（動詞）
死なん　死なず　死にけり　死ぬるが　死ぬれど（動詞）
黒く　黒き　黒けれ（形容詞）
惡し　惡しき　惡しけれ（形容詞）
悲し　悲しき　悲しけれ（形容詞）

等の詞に就て、線を付したる如く形の變化する部分を語尾と云ひ、其上なる變化せざる

部分が卽ち語根なり、最初の例にて云はゞ思(おも)が語根、第二の例にては書(か)が語根、最後の例に就て云はゞ悲(かな)が語根にてあるなり。

二一二　左の動詞は如何にして語根と語尾を區別するか

來(こ)ん	來(き)けり	來(く)べし	來(く)るならん	來(く)れば　來(こ)ず
爲(せ)ん	しけり	すべし	するならん	すれば　せず

答　これ二つながら變格の詞なり、此二つの詞は語形全體が變化するを以て語根語尾の別をつけ難し、語根までも變化する一特例として見る外なかるべし、斯かる例は此二つの詞の外には無し。

二一三　左の文に就て助動詞の時を示せ

(1)我汝を打たむ
(2)雨降りたり
(3)何某と云ふ人ありけり

答　右の文に於て助動詞は(1)のむ(2)のたり(3)のけりにして(1)は未來、他の二つはいづれも過去の意を表はせり。

二一四　左の文中に見ゆる助動詞は何種に屬せるか

(1)誠に希世の英傑と云ふべし。
(2)子としては孝養を第一と心得べし
(3)善良の人となりたし

答　右の文にては(1)のべし(2)のべし(3)のたしが助動詞にして、此中(1)は推量、(2)は命令、(3)は希望の助動詞なり。

二一五　動助辭靜助辭とは如何なる區別なるか

答　助辭を大別して此二種となせるものにして、動助辭とは動詞形容詞の如く形の五段に變化するもの、靜助辭とは更に變化せぬものを云ふ、左に兩種助辭の例を示さん

●動助辭

將然言	續用言	終止言	續體言	既然言
なら	なり	なり	なる	なれ
て	て	つ	つる	つれ
な	に	ぬ	ぬる	ぬれ
○	○	○	らむ	らめ

最後の○印あるはそこに活くべき詞なきを示したるものなり

●靜動辭

がな　やは　だに　さへ　も　に　を　は　ば

是等いづれも別種にして活用なし

二一六　左の文中に於ける係結法の誤謬を指示せよ

(1)彼れ等は皆我が交はる人々なる、げに友だちこそ多くなん持たまほしき

(2)昔しこうかゝるためしもありける、今日いかでかさる事をなさめ

(3)院中の禮などいふことなんこれよりぞ定まりける

(4)此事のみなん常に思ひ侍り

答　(1)は上に、彼等ばとありて下に人々なると受けたるは誤りにて、上のばをぞと改むるか、さらずは下のなるをなりと改むべし、又友だちこそと云ひて下に又なんのテニヲハの重りたるは誤なり、此文にてはこそをはと改むるかさらずばなんを除きて末のあらまほしきをこその結び詞なるあらまほしけれと改むべし、

(2)は上にこそとありて下にけると受けたるは誤なりけれと改むべし、又上にかとありて末をなさめとしたるは誤なり、なさんに改むべし

(3)はなんとぞと重りたるが誤りなり、二つの中いづれかを削らば可なり、但しなんを削るとぞを削るとは文の意義にては少しく差違を來すなり。

(4)上になんとありて下を侍りと結びたるは誤なり侍ると改むべし。

二一七　左の文章及歌に就きて係結の關係を指示し若し誤あらば正せ

(1)故郷を出でける時にこそ我は近くなん歸り來るとは云ひけれ

(2)外より來る者などぞ殿はいかにかならせたまへるなど問ふ

(3)むかし在原の業平となん云ふ人ありけり

(4)春の花のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ

(5)影こはる霜夜の月ぞ秋をおきて時こそあれとさやけかりける

答　(1)(2)(5)は一見して係詞二つ重なりたるやうに見ゆれども實は然らず、此三つはいづれも一つの係結の間へ他の係結が挾まりたる格即ち挿入文あるものにて、右のまゝにて更に不可なる點なし、(1)のこそは係詞は末なるけれにて受け、なんは來るにて結べり、(2)のぞは末の間ふにて結び、かはたまへるにて結べり、(5)のぞは末のけるにて結び、こそはあれにて結べり、又(3)は上になんとありて末がけりなる故一見誤なるに似たれど、實はなんの係詞は云ふにて結びたるを、云ふが終止言なる故接續詞

なしに下の文に連續したるにて誤にあらず、(4)は下の句に係結兩種あり、こそは見ねにて結びやはけるにて結べり。これも誤なし。

二一八　左の歌の倒置句を正叙の體になほせ

(1)夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて
(2)おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧つせなれば
(3)名にしおはゞいざこと〻はん都鳥我思ふ人はありやなしやと
(4)ぬれつゝぞ強いて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば
(5)塵をだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とはがぬる床夏の花
(6)わがせこをこふるもくるしいとまあらば拾ひてゆかん人忘れ貝

答 左の如し
(1)夕ぐれは天つ空なる人を戀ふとて雲のはたてに物ぞ思ふ
(2)おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我は瀧つせなればせきあへず
(3)都鳥名にしおはゞ我思ふ人はありやなしやといざこと〻はん
(4)春は年の内に幾日もあらじと思へばぬれつゝぞ強いて折つる
(5)さきしより妹とわがぬる床夏の花(に)塵をだにすゑじとぞ思ふ
(6)わがせこを戀ふるもくるしいとまあらば人忘れ貝(を)拾ひてゆかん

二一九　左の文と歌とに就て省略語を指示せよ

(1)竹の子にちりかゝらなん梅の花雪の中のをとると見るべく
(2)夕つく日さすや岡邊の松の葉のいつともわかぬ戀もするかな
(3)白雲のこなたかなたに立別れ心をぬさとくだく頃かな
(4)つの國のなには思はず山城のとはに逢ひ見んことをのみこそ

答 省略せられたる詞を其位置に括弧内に入れて示すこと左の如し
(1)竹の子に散りかゝらなん梅の花雪の中の(竹の子)をとると見るべく
(2)夕づく日さすや岡邊の松の葉の(ごと〳〵)いつともわかぬ戀もするかな
(3)白雲のこなたかなたに立別れ(て)心をぬさとくだくころかな
(4)つの國のなには思はず山城のとはに逢見んことをのみこそ(おも〳〵)

二二〇　左の題の中枕詞と序詞とを指示せよ

(1)すみの江の岸による波夜さへや夢のかよひぢ人目よくらん
(2)あしびきの山鳥の尾のしだりをのながゝし夜をひとりかもねん
(3)わだのはらこきいでゝ見れば久方の雲井にまがふ沖津しら浪

答 (1)は二の句迄が序詞、(2)は三の句迄が序詞(3)は三の句が枕詞なり、尤(2)は

初句あしびきのが山にかゝる枕詞なれど、三の句迄を過ぎて序詞となれり、これは枕詞入りの序詞とも云ふべきか。

三二一　せしとしゝとの區別を問ふ

答　四段活の詞は續用言のしにしの辭をかけてしゝと云ひ、(例へば寫しゝ、貸しゝの如く)又下二段活の詞は續用言のせに、變格活は將然言のせに、いづれもしをかけてせしと云ふ、例へば、任せし、疲せしの如し、されば

自らなせし禍なり　(四段活の詞故なしゝと改むべし)

人を殺せし賊捕はれたり　(四段活の詞故殺しゝと改むべし)

事を自ら爲さずして人に任しゝは失敗なりき(變格活故任せしと改むべし)

の如きはいづれも下の括弧内に記せし如くすべきなり。

三二二　ましとまじとは如何なる差ありや

答　ましは將にしかせんと欲する意を表はし(待たまし、行かまし、爲さましの如く)まじは他を推測る否定の意の詞なり、(待つとも彼れは來まじ、君はまだ遠くは行くまじの如く)ましの方は將然言を受け、まじの方は終止言を受くる定めなり。

動詞形容詞活用圖

種類	活行	活語の例	第一段活用將然言	第二段活用續用言	第三段活用終止言	第四段活用續體言	第五段活用既然言	徒等の結	結
四段活	加行 佐行 多行 波行 麻行 良行	書推打買讀取	かさたはまら	りみひちしき	るむふつすく	るむふつすく	れめへてせけ	第一段結は、に、を、ぞ、なん、も、の、がや、か、の	第二段結
上一段	加行 奈行 波行 麻行	着似干見	きにひみ	きにひみ	きにひみるるるる	きにひみるるるる	きにひみれれれれ		第三段結 こその結

活	下一段活	上二段活	下二段活	變格
也行 和行	加行	多佐加行 波麻也行	阿行 加行 多佐加行 奈多佐加行 波麻也行	奈佐加行
射居	蹴	起堀落生恨老懲	得受獲當兼辨埋消枯餓	去爲來
おい	け	きしちひみいり	えけせてねへめえれゑ	なせこ
おい	け	きしちひみいり	えけせてねへめえれゑ	にしき
おいそる	ける	るゆむふつずく	うるゆむふぬつずくう	ぬすく
おいるる	ける	るゆむふつずく るるるるるる	うるゆむふぬつずくう るるるるるるるる	ぬすくるるる
おいれれ	けれ	るゆむふつずく れれれれれれ	うるゆむふぬつずくう れれれれれれれれれ	ぬすくれれれ

活	形容詞
有	善惡
り	しく しく
り	しく しく
る	しき しき
れ	しけれ しけれ

助動詞活用圖

	例	第一段活用終止言	第二段活用終止言	第三段活用終止言	第四段活用連體言	第五段活用既然言
能動及受動	る、打たる等の）	れ	れ	る	る、	るれ
	らる（立てらる等の）	られ	られ	らる	らる、	らるれ
役動	す（打たす等の）	せ	せ	す	する	すれ
	さす（立てさす等の）	させ	させ	さす	さする	さすれ
	しむ（受けしむ等の）	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ
被役動	せらる（讀ませらる等）	せられ	せられ	せらる	せらる、	せらるれ
	させらる（植ゑさせらる等）	させられ	させられ	させらる	させらる、	させらるれ
	しめらる（植ゑしめらる等）	しめられ	しめられ	しめらる	しめらる、	しめらるれ

第一段結は、に、を、ど、なん、ぬ、の、が、や、か、の等の結　第二段結そ、こその結　第三段結

推量	ちむ（打つちむ等の）	ちむ	ちむ	ちめ		
	めり（打つめり等の）	めり	めり	めれ		
	らし（打つらし等の）	らし	らし	らしけれ		
	べし（打つべし等の）	べし	べき	べけれ		
	けむ（打ちけむ等の）	けむ	けむ	けめ		
否定	ず（打たず等の）	ず	ず	ねず		
	ざり（知らざりけり等）	ざり	ざり	ざれ		
	まじ（打つまじ等の）	まじ	まじく	まじき	まじけれ	
	じ（打たじ等の）	じ	じ	じ		
斷定	なり（打つなり等の）	なり	なり	なる	なれ	
	たり（君たり、臣たり等の）	たり	たり	たる	たれ	
希望	たし（打ちたし等の）	たく	たし	たき	たけれ	

過去	つ(打ちつ等の)	て	て	つ	つる	つれ
	ぬ(打ちぬ等の)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ
	たり(打ちたり等の)	たら	たり	たり	たる	たれ
	けり(打ちけり等の)	けら	けり	けり	ける	けれ
	き(打ちき等の)			き	し	しか
未來比類	む(みたむ等の)			む	む	め
	ごとし(打つごと〜等)	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	ごとけれ

日本文典之部 終

英文典之部

第一章　總論

一　文章（Sentence）とは何ぞ

答　文章とは言語の集合して一つの完全なる意義を表はすものを云ふ、例へば The moon shines by night. A ship went out to sea. 等の如きもの是なり。

二　文章の主語（Subject）及叙語（Predicate）とは如何

答　文章を構成するには、人若しくは事物を指示する言語と、其人若しくは事物に就て何事をか叙説する言語とを要す、此前者を文章の主語と稱し、後者を叙語と稱す、左に擧げる文の草體字のものは主語にして、其他は叙語なり。

He goes. A boy came. I am glad. John is crying.

三　名詞（Noun）とは何ぞ

答 總べて事物の名を表はす詞なり、House. Ship. John. Dog. 等の如し。

四 代名詞 (Pronoun) とは如何

答 名詞の代りに用ひらるゝ詞にして、其主なる用は文章中に名詞の反覆を避るに在り、I. He. She. It. They. 等の類は皆代名詞なり。

五 動詞 (Verb) とは如何

答 人若しくは事物に關して事を叙說するに用ひらるゝ詞にして、He *wrote*. A man *came*. Dogs *bark*. の草體字の如き皆動詞なり。

六 形容詞 (Adjective) とは如何

答 各詞に何等かの意義を附加する目的を以て用ひらるゝ詞を云ふ、A *tall* man came. A *fine* ship went out to sea. の草字體の如きもの是なり。

七 冠詞 (Article) とは如何

答 冠詞とは A, An, 及び The の字を云ふ。冠詞は實は形容詞の一部にして、即ち A 又は An は One といふ形容詞の變體、又 The は this, that, these, those 等の畧辭

なり。

八 副詞 (Adverb) とは如何

答 動詞、形容詞、又は他の副詞等に何等かの意義を附加する目的を以て用ひらるゝ詞なり、形容詞は名詞を形容すれども、副詞は名詞代名詞を形容せず、其他は如何なる辭をも形容す。That very fine ship has *already* sailed *half* through the Channel. の如し。

九 前置詞 (Preposition) とは如何

答 名詞若しくは代名詞と他の語との間に於ける意味の關係を表はす詞にして、The pen is *on* the table. A ship went out *to* sea. の如し

一〇 接續詞 (Conjunction) とは如何

答 言語と言語、又は文章と文章を聯結する詞を云ふ、例へば I have a book *and* a slate. He is poor, *but* he is honest. の如し。

一一 間投詞 (Interjection) とは如何

答 感動を表はす爲めに用ふる詞にして、他の辭の如く文章中の他辭に結合せらるゝこ

となく、文中に獨立して挿入せらるゝなり。My grandfather, *alas*! is dead. *Oh*! what shall I do! の如し。

一二 句(Phrase)とは如何

答 言語集りて一個の意義を形造れども、猶完全なる意義を表はさゞる時之を句と稱す。例へば On the river. By the road. A bird in the tree. の如きもの是なり。

一三 成句(Clause)とは如何

答 一つの大文章中の一部たるに文章を成句といふ、例へば This is the house where I live. なる文章は、二つの小文章集りて更に大なる一文章を成せるもの(前半には This といふ主語と is といふ叙語なり、又後半にも I といふ主語と live といふ叙語とありて、それ〳〵一つの文章を成せり)此各部の小文章を成句と稱す。

一四 文章の種類を擧げよ

答 文章に五種あり、一、確定文(Assertive)二、命令文(Imperative)三、疑問文(Interrogative)四、願望文(Optative)五、感動文(Exclamatory)是なり。

一五 文章の五種に就て例を擧げよ

答 確定文は單に物事を肯定し又は否定する文にて文の普通の形なり。A man's success depends chiefly on himself.(肯定文) He did not get much help from others(否定文)の如し、命令文は命令又は禁止の意を表はす文にて Rely chiefly on your own efforts. Do not rely much on the help from others. の如し、疑問文は事物を問ふ意味を表はし、Has you read that book? When do flowers bloom? の如し、願望文は願ひの意を表はし、God save the queen. の如し、感動文は確定文と結合して事を叙述しながら感動を表はす文にて How eloquent he is! What a foolish fellow you have been! の如し。

第二章　名詞

一六　名詞の種類を問ふ

答　名詞には五種の別あり、即ち固有名詞(Proper noun)普通名詞(Common noun)集合名詞(collective noun)物質名詞(Material noun)無形名詞一名抽象名詞(Abstract noun)是なり。

一七　固有名詞とは如何例を擧げて答へよ。

答　特殊なる一個の人若くは物を表はす詞を云ふ、人名、地名、國名等皆固有名詞也、即ち Napoleon(人名) America(國名) Tokio(市名)等の如きもの是なり、其他學科の名、病名等も亦固有名詞なり、固有名詞は頭字を以て書き始むる例なり。

一八　普通名詞とは如何例を擧げて示せ。

答　特殊なる一個の人若くは物を表はすに非ずして、同種類中の人若くは物の何れにも共通なる名詞を云ふ、man(人) book(書物) city(市) country(國)の如きもの是なり。

一九　集合名詞とは如何例を擧げよ、

答　同種の個體が集りて一團を成したるものを一個體として表はす詞にして、實は普通名詞中の一種と見て可なり、即ち nation(國民) regiment(聯隊) fleet(船隊) parliament(國會) mob(一揆) company(會社) family(家族) meeting(會合) navy(海軍) army(陸軍)等の如し。

二〇　物質名詞とは如何例を擧げよ

答　物を形成せる實質を表はす詞にして、例へば iron(鐵) water(水) wine(酒) salt(鹽) sugar(砂糖) gold(金) paper(紙) tobacco(烟草) cotton(綿)等の如し

二一　普通名詞と物質名詞との差違如何

答　普通名詞は同種類たる多數の物に共通する名にて或定まれる形の物を表はせども、物質名詞は定れる形なき物質の名なり。例へば man, book の如きは一定の形あるもの、名稱故普通名詞なれども、water, wine の如きものは更に定まりたる形なく、何れの地に求め、又如何なる部分を取りても水たり酒たることを得るもの故物質名詞として區別しあるなり。されは普通名詞は數に依りて計算し得べきが故に複數の形あれども、

物質名詞は數に依りて計算すべからざるもの、名なるが故に、普通の場合に於て複數の形なきものとす。

二二 無形名詞(又は抽象名詞)とは如何例を擧げよ

答 實物を離れて、其性質、狀態、動作等を表はす詞を云ふ、固有名詞、普通名詞、集合名詞、物質名詞の四種は孰れも感覺し得べき物體に關したる詞なれども、無形名詞に至りては、五官に感覺すること能はずして、物體より引離れて思考し得べき事に關す、無形名詞の例は性質を表はすものにては wisdom (智慧) height (高さ) bravery (勇敢) 等の如く、狀態を表はすものにして pleasure (快樂) boyhood (少年時代) の如く、動作を表はすものにては laughter (大笑) movement (運動) revenge (復讐) 等の如し。

二三 無形名詞は如何なる場合に於て普通名詞として用ひらるゝか

答 其性質を有する人物を表はす場合又は性質、動作、狀態が附屬する物を表はす場合等には全く普通名詞として用ひらるゝことあり、例へば beauty, witness は美麗、證據といふ意味に用ひらるゝ時は無形名詞なれども、之を美人、證人といふ意味に用ふる時は普通名詞となり、又 sight, speech を視力、說話力の意味に用ふる時は無形名詞なれど

も、之を景色、演說の意味に用ふる時は普通名詞となるが如し、無形名詞はもと冠詞も付かねば、又複數にもならぬものなれども右の如く普通名詞として用ひらるゝ場合は勿論冠詞も付き複數にもなり得るものなり。

二四 名詞の「數」(Number) とは如何

答 名詞が一人若くは一物を表はす時は單數 (singular number) と稱し、二個以上の人又は物を表はす時は複數 (plural number) と稱す、されど複數となし得べきは普通名詞集合名詞のみにして、他の固有名詞、物質名詞、無形名詞は單數のみにして複數なし、但し普通名詞として用ひられたる場合は此限にあらず。(上項參照)

二五 複數をつくる通則は如何

答 通常は單數の尾に s 字を附加すれども、若し名詞の語尾が s, x, sh, ch にて終る時は單數に es を附加し、又名詞が y にて終り其 y の前が子音 (Alphabet 二十六字の中 a, e, i, o, u が母音にして他は皆子音なり) ならば、其 y を ies に變じて複數とし、若し又 y の前が母音ならば單に s を附加し、又名詞の語尾が o にて終り其 o の前が子音ならば es を附加し、(但し若干の語は此場合にも單に s のみを附加する例となりをれるものあり) es, is, es, 又は ys にて終るときは s のみを附加し、名詞が f 又は fe にて終

る時は、複數を作るに、其 f 又は fe を ves に變ずるものと、單に s のみを附加するものとあり、(下項に說くべし) 猶外に不規則に複數を作る例若干あり、りは名詞の內部の母音を變化するもの、語尾に en を附加するもの等なり、別項に說くべし。

二六 各種の複數に就て例を擧げよ

答 左の如し

(一) 語尾に s を附加する例

單數	複數	單數	複數
Book	Books	Hand	Hands

(二) 語尾に es を附加する例

Glass	Glasses	Brush	Brushes
Bench	Benches	Box	Boxes

(三) 語尾の y を ies に變ずる例 (y の前子音なり)

Lady	Ladies	Army	Armies
Duty	Duties	Fly	Flies

(四) 語尾 y にして、前に母音あるが爲めに單に s を附する例

Boy	Boys	Day	Days

Key	Keys	Monkey	Monkeys

(五) 語尾 o にして es を附する例 (o の前子音なり)

Hero	Heroes	Cargo	Cargoes
Potato	Potatoes	Volcano	Volcanoes

(六) 語尾 o にして單に s のみを附する例 (語尾 oo, io, eo, yo, に終る語は皆單に s を附加す、又上例(五)の如く子音に先だゝれたる o にて終る名詞にても單に s のみを附加する例となれるもの若干あり)

Bamboo	Bamboos	Cuckoo	Cuckoos
Cameo	Cameos	Hindoo	Hindoos
Embryo	Embryos	Portfolio	Portfolios
Grotto	Grottos	Halo	Halos
Piano	Pianos	Cinto	Cintos

(七) 語尾 o に終る名詞にして s 若くは es 双方の中孰れかを隨意に附加する例、これは唯左に擧げたる外には殆んど無し。

Calico	Calicos 或は Calicoes		
Mosquito	Mosquitos 或は Mosquitoes		
Portico	Porticos 或は Porticoes		

（八）語尾 f 若くは fe を ves に變ずる例

Half	Halves	Calf	Calves
Life	Lives	Wife	Wives
Thief	Thieves	Leaf	Leaves

（九）語尾 f 若くは fe にして而も單に s のみを附加する例（斯る名詞は少數なり）

Chief	Chiefs	Leef	Leefs
Gulf	Gulfs	Roof	Roofs
Brief	Briefs	Grief	Griefs
Handkerchief	Handkerchiefs	Strife	Strifes

（十）語の內部なる母音を變ずる例

Man	Men	Woman	Women
Foot	Feet	Mouse	Mice

（十一）語尾に en を附加する例

Ox	Oxen	Child	Children

右の外、複數の形を兩樣に有して其意味各異なるものあり、又單數複數とも同形なるもの等其他數種あり（下項參照）

二七　複數の形二種を有して其意各異なる名詞を擧げよ

答　左の如し

Brother	brothers 兄弟 brethren 同教會仲間	Die	dies 貨幣を造る原版 dice 遊戲用の骰子
Cloth	cloths 織物 clothes 衣服	Genius	geniuses 天才 genii 昔話の妖魔
Staff	staves 杖 staffs 參謀	Shot	shot 彈丸 shots 彈丸放發の數
Index	indexes 目錄表 indices 代數學に用ゐる記號		

二八　單數と複數と同形なる名詞を擧げよ

答　左の如し

單數	複數	單數	複數
Sheep	Sheep	Deer	Deer
Teal	Teal	Salmon	Salmon

Heathen Heathen Common Common

二九 形は單數なれど常に複數の意義に用ひらるゝ名詞を擧げよ

答 Cattle (家畜) Vermin (蟲) Swine (豕) People (人民) 是なり。

三〇 複數には用ひられざる名詞を擧げよ

答 Abuse (罵詈) Information (知識) Alphabet (イロハ字) Furniture (家具) Offspring (子) Poetry (詩) Scenery (景色) Issue (小兒) Folk (人民) 等の如し、其他無形名詞は皆然り。

三一 單數は一意義にて複數には二種の意義ある名詞の例二三を擧げよ

答 左の如し

Custom (習慣) Customs (習慣、税) Pain (痛苦) Pains (痛苦、勞力)
Effect (結果) Effects (結果、動產) Spectacle (觀物) Spectacles (觀物、眼鏡)

三二 合成名詞の複數は如何にして作るか

答 合成名詞卽ち二個以上の語の集りて一語を成せる名詞は大抵其主要の語に s を附加する例とす、例へば Father-in-law を Fathers-in-law とするが如し、又主要語が尾に在る場合は step-son を Step-sons もし Foot-man を Foot-men とするが如し、尤も左の四つの合成名詞に限りては二重の複數形を作る例なり。

Man-servant Men-servants Woman-servant Women-servants
Lord-justice Lords-justices Knight-templer Knights-templers

三三 名詞の「性」(Gender) には幾種ありや

答 文法上凡べての名詞に性を付す、性には四種あり、卽ち男性(Masculine gender)女性(Feminine Gender)通性(Common Gender)中性(Neuter gender)是なり

三四 各種の性に就て例を擧げよ

答 男性とは Man, Father, King 等の如きを云ひ、女性とは Woman, Mother, Queen の如きを云ひ、通性とは Parent, Child, Cousin の如く男女兩性を通じて示す詞を云ひ中性とは Tree, House, School, Gold の如き無生物の名を云ふなり。

三五　男女兩性を書き別くる方法を問ふ

答　名詞の性を書き別くるには左の三種の方法を用ふ

（一）全く異りたる語を用ふるものにて例左の如し

男性	女性	男性	女性
Boy	Girl	Man	Woman
Brother	Sister	Son	Daughter
Gentleman	Lady	Nephew	Niece

（二）前若くは後に附加せらるゝ異りたる語に依りて區別するものにて例左の如し

Man-servant	Woman-servant	He-goat	She-goat
Grand-father	Grand-mother	Land-lord	Land-lady

（三）語尾の變化に依りて區別するものにて例左の如し

Author	Authoress	Count	Countess
Actor	Actress	Negro	Negress
Emperor	Empress	Lad	Lass

三六　通性の名詞の例若干を擧げよ

答　通性即ち男女兩性を通じて用ふる名詞の例は person, parent, friend, cousin, child, baby, pupil, orphan, pig 等の如し

三七　無性名詞の擬人せられたる場合は如何にして性を別つか

答　中性の名詞の擬人せられたる場合は、大概强大なるもの威嚴あるもの等は男性として用ひられ、弱小のもの優美なるもの等は女性として用ひらる、Death, War, Sun, Summer 等は男性となり、Spring, Virtue, Earth, Moon 等は女性となるが如し、擬人（Personification）とは無生物を假りに人の如く見做して表はす場合を云ふ、

三八　名詞の格（Case）とは如何及其種類を擧げよ

答　格とは文章中に在りて名詞が他の語に對する關係を名けたるものにして、格には三種あり、主格（nominative case）持格（possesive case）賓格（objective case）是なり。

三九　主格とは如何例を擧げよ

答　文章中に於て名詞が動詞の主語となる場合を指して云ふ

John goes to school. The *boy* cry's. The *boy* is called.

右の各文章に於て John, boy は主格なり。

四〇 持格を説明して例を擧げよ

答 名詞が他の名詞の前に在りて、所有の意を表はす時之を持格と云ふ、これを作るには普通其名詞の語尾に 's (apostrophe s) を付する定めなり即ち左の如し。

The *boy's* book. The *girl's* eye. *James's* hat.

若し其名詞が複數なりし場合は *boys'* book の如く單に ' のみを付す、但し複數にても語尾が s にて終らざりし場合は children's の如く矢張 's を付するなり。

四一 實格とは如何

答 名詞が動詞若くは前置詞の賓語たる時に之を賓格と稱す。

The man struck the *boy*. The man is kind to the *boy*.

右の文に於て boy は賓格たるなり。

四二 合成語の持格は如何にして作るか

答 合成語、及び二語以上より成る人の名は、其最後の語のみに持格の符號を付する定めなり、Son-in-law's hat, Maid-servant's hand, Peter the Great's mother 等の如し。

四三 持格と爲すべからざる名詞ありや

答 持格と爲し得べきは通常人類及び動物の名に限ることにて、無生物の名は持格と爲すことを得ず、故に The house's roof, my room's door の如きは誤りなり、斯る無生物の所有の關係を表はさんとする場合は The roof *of* the house, The door *of* my room の如く、前置詞 of を用ふるなり、されど無性物にても或尊重なる事物を表はす名詞、時間、空間、重量等を表はす名詞は持格と爲すこと無きにあらず、The moon's rising. A day's journey. A mile's riding. A shilling's worth. 等の如し。

第三章　代名詞

四四　代名詞の種類を問ふ

答　代名詞は名詞若くは名詞同等辭の代りに用ひらるゝ詞にして、其主なる目的は、文章中に名詞の反覆を避くるに在り、I, you, he, she, which, who 等の類にして、三つの種類あり、人代名詞（Personal pronoun）指示代名詞（Demonstrative pronoun）關係代名詞（Relative pronoun）疑問代名詞（Interrogative pronoun）是なり。

四五　人代名詞とは如何

答　人代名詞は人に代るが故に斯く名けたるにて、此人代名詞には三種の人稱あり、第一人稱、第二人稱、第三人稱是なり、話しつゝある人を表するものを第一人稱の代名詞と云ふ、I, we 等の如し、又話しかられたる人を表するものを第二人稱の代名詞と云ふ、you, thou, ye の如し、又談話中に出つる人を表はすものを第三人稱の代名詞と云ふ、he, she, it, they, 等の如し。

四六　人代名詞の變化を問ふ

答　人代名詞は數及び格に依りて其形を變化すること左の如し

		單數	複數
第一人稱	主格	I（余は）	we（余等は）
	持格	my, mine（余の）	our, ours,（余等の）
	賓格	me（余に、余を）	us（余等に、余等を）
第二人稱	主格	you, thou（汝は）	you,（汝等は）
	特格	your, thy, thine（汝等の）	your, yours（汝等の）
	賓格	you, thee（汝等に、を）	you（汝等に、を）

右の二種は男女兩性を通じて用ふれど、第三人稱のみは單數の時は男性女性中性の三つに分る、されども複數の場合は三性とも同一となる、左表の如し

		單數 男性	單數 女性	單數 中性	複數
第三人稱	主格	he	she	it	they
	持格	his	her, hers	its	their, theirs
	賓格	him	her	it	them

四七　人代名詞の持格に二種の形あるものは用法に如何なる差違ありや

答 此二種の形あるものは、第一形は my, thy, her (單數) our, your, their (複數) にして、第二形は mine, thine, hers (單數) ours, yours, theirs (複數) なり、此第一形に屬するものは、持格が名詞の前に置かるゝ時に用ひらる、例へば This is *my* book. That is *their* house. の如し、第二形は三種の用法あり、卽ち(一)代名詞と其名詞との間に動詞が來る時(例へば This book is *mine*. That house is *theirs* の如し)(二)名詞が省畧せらるゝ時(例へば My horse and *yours* are both tired)(三)は代名詞の前に of なる語ある時(例へば That book of *yours* is lost. の如し)に用ひらるゝなり。

四八 人代名詞の合成形を問ふ

答 人代名詞に、單數には self 複數には selves を結合したるものあり、myself, ourselves yourself, yourselves, himself, himselves, itself, herself, themselves 等の如し。

四九 指示代名詞(Demonstrative pronouns)とは如何

答 前に述べたる事項を指摘して其代りに用ひらるゝものなり、(this, that, these, those, one, ones, none, such 等是なり、又 he, she, it, they, 等の如きは人代名詞なれども、前にある名詞を指摘するものなるが故に是亦指示代名詞と稱し得べきなり。

五〇 指示代名詞としての this, that, these, those の

用法を問ふ

答 (一)指示代名詞としての(形容詞として用ひらる場合と異なり、)用法は左の如し、前に在る文中に二個の名詞記されたる時は that は初の名詞を代表し、this は後の名詞を代表す

Work and *play* are both necessary to health; *this* gives us rest, and *that* gives us energy.

此文にて this は play を代表し that は work を代表す

(二) that は其複數 those と共に、前に記されたる名詞の代用となる

The air of the hills is cooler than *that* of the plain.

The houses of the rich are larger than *those* of the poor.

前の文の *that* は air の代用をなし、後の文の *those* は houses の代用を爲す。

(三) This と that と it の如く前に記されたる文章の代理として用ひらるゝとあり。

I studied Greek and Latin when I was young; and *that* at Oxford.

You paid your debts; and *this* is quite sufficient to prove your honesty.

前の文の *that* は I studied Greek and Latin なる文の代用をなし、後の文の *this* は the payment of your debts なる句の代用をなせり。

五一　指示代名詞としての It の用法を問ふ

答　It は普通に無生のものを指示す、The sun has risen; it shines brightly. の如き是なり されど有性のものにても性を區別する要あらざる時には之を用ふ It is healthy child の如し、又 It は前に記されたる句、文章の代理をなることあり、Make the fast use of your time at school; It is a wise way. の如し、其他 It は性と人稱と數との規則に背き極めて不定に用ひらるゝことあるにより、不定指示代名詞と稱せらる、不定の關係の例二三を擧ぐれば

It is cold.（これは The air is cold. といふ處を省畧して斯く云ひたるなり）

It is I who told you that.（これは次ぎに來る you なる代名詞を優勢ならしめたるなり）

What a pretty girl it is! What an ass it is!（これは前の文にては現愛の意を表はし後の文にては侮蔑の意を表はせり。

五二　指示代名詞 One の用法を問ふ

答　One は定まりたる事物を指すものならざるにより、之亦不定指示代名詞なり、人の意味に用ひらるゝ時は any person, every person, の意味に多く用ひらる、One should

take care of one's health, の如し、物の意味に用ひらる・時は名詞の反覆を避くる爲めにして、前に記されたる名詞を代表するなり、This knife is a good one の如し、

五三　關係代名詞を説明せよ

答　關係代名詞とは指示代名詞の如く前に在る名詞に關係するのみならず、猶又二個の文章を結合する働きあるものを云ふ、例へば This is the house; I built it. と云ふ文章に就て云はんに、此文章中の it は指示代名詞にして單に the house なる名詞を代表するのみなれども、今此文を This is the house, which I built. とする時は which は啻 the house を代表するのみならず、二文章を結合するの働きを爲せるを見るべし、此 which は即ち關係代名詞中の一なり。

五四　關係代名詞の先行詞（Antecedent）とは何ぞ

答　關係代名詞の先に立つ名詞にして、關係代名詞は他の代名詞の場合とは異りて其先行の名詞と結合して離るべからざるものなり、上項の例に擧げたる文章に就て云はゞ the house は which なる關係代名詞の先行詞なり。

五五　關係代名詞の種類及其特殊の効用を問ふ

答　關係代名詞のおもなるもの四種あり、who, which, that, what 是なり、此中 who と whi-

ch さは最普通に用ひらる、who は人及び擬人せられたる物若くは高等の動物にのみ關係して用ひられ、which は人間以外の動物全體及び無生物に用ひられ、that は人と無生物とに用ひられ(卽ち who 若くは which の代用をなし) what は無生物に用ひらる、此 what のみに限りて先行詞無しに用ひらる、實は一語にて先行詞と關係代名詞とを兼ねたる側きある語にして the thing which といふに同し義を含めるなり。

五六 關係代名詞の變化を示せ

答 關係代名詞四種の中 that, what の二語には變化なきも、who, which の二語には之あり、卽ち主格、持格、寄格等の格によりて形を異にす、尤も單數複數の區別及男性女性の區別はなし。變化の狀態は左の如し。

主格	Who	Which	
持格	Whose	Whose 又は of which	
寄格	Whom	Which	

五七 Who なる關係代名詞の格の變化に就て例を擧げよ

答 左の如し

主格 He is the boy *who* lost the book.

持格 He is the boy *whose* book was lost.

寄格 He is the boy *whom* we saw yesterday.

五八 關係代名詞の先行詞の省略せらるゝ場合を問ふ

答 who, whom は往々先行詞の省略せらるゝことあり、例へば *Who* steals my purse, steals trash. なる文にて who は he なる先行詞が略されあり、又 *Whom* the gods love, die young. の文章にては whom は those person なる先行詞が略されあるなり。又 ever 若くは soever を關係代名詞に附加する時は先行詞の省略せらるゝのみならず、總額を意味することゝなる、例へば

Whosoever breaks this law will be punished, *wherever* he may live.

なる文にて whoever は *every person who* 又 wherever は *every place where* の意なり。

五九 疑問代名詞 Interrogative pronoun を說明せよ

答 問ひを發する時に用ふる代名詞にして、主なるもの三種あり who, which, what 是なり。用例は *Who* wrote that book? *Which* of these books do you prefer? *What* is the name of that book. の如し。

六〇 三種の疑問代名詞の特質を問ふ

答 who は「誰」の意義にして人に關する問ひにのみ適用せらる *Who* is he? (彼れは誰な

るか）の如し、which は人にも物にも適用せられ、數多のもの〻中より一を選び定むるやうの意味に用ひらる *Which* is he? （彼れはどの人なるか） *Which* of these books do you like? （是等の書物の中にて汝はいづれを好むか）の如し、又 what は「何」の意義にして事物を問ふに用ふ、又人の身分職業等を問ふ場合にも用ふ、*What* is he? （彼れは何なりや即ち身分職業は何なりやの義） *What* is this bird? （此鳥は何なりや）の如し。

六一　疑問代名詞には如何なる變化ありや

答　疑問代名詞には數及び性の區別なし、三種の中 who のみは格の變化あり、左の如し

主格　*Who* is he? *Who* goes there?
持格　*Whose* book is that? I don't know *whose* it is.
賓格　*Whom* have you met? To *whom* do you want to speak?

第四章　形容詞

六一　形容詞の種類を擧げよ

答　形容詞を別つて左の五種とす（此の外分類法には種々の異說あり）

一　固有形容詞 (proper adjectives)
二　性質形容詞 (descriptive adjectives)
三　量形容詞 (quantitative adjectives)
四　數形容詞 (numeral adjectives)
五　代名形容詞 (pronominal adjectives)

六二　固有形容詞を說明し例を擧げよ

答　固有名詞を假り來りて事物を形容する詞にして、例へば（一）The *Japanese* language. （二）The *Chinese* pilgrim. （三）The *Socratic* method. 等の如し、上例を若し固有名詞を用ひて記さば（一）The language of Japan. （二）A pilgrim from China. （三）The method invented by Socrates. なり、固有形容詞は必らず頭文字を以て書き始むる規定なり、

六三　性質形容詞を說明し例を擧げよ

答 性質、狀態を具したる人又は事物を表はす名詞の通用を制限する形容詞にして、例へば a *rich* man; a *sick* child; a *diligent* student; a *large* field; a *wise* man; a *black* horse 等の如し

六四 量形容詞を問ふ

答 事物の分量又は程度を表はす形容詞にして、much, little, some, any, no, none, all, whole 等の如き是なり、此量形容詞に形容せらるゝ名詞は必らず物質名詞か又は無形名詞に限り、數は單數たらざるべからず、Much *bread* (物質名詞) Much *pain* (無形名詞) 等の如し。

六五 量形容詞 Some と Any の區別を問ふ

答 双方とも若干の分量を意味するには相違なきも用法には大差違あり、some は肯定の文に用ひられ、any は否定の文に用ひらる、例へば He ate *some* bread. He did not eat *any* bread. の如し、若し He ate *any* bread. He did not eat *some* bread. とせば大なる誤なり、斯くの如く兩詞は用法異なれども、唯疑問文には双方同樣に用ひらるゝこともあり、Has he eat *any* bread? Has he eat *some* bread? の如し。

六六 量形容詞 Little には如何なる用法ありや

答 little は小量を意味する形容詞なれど、單に little とふも a little とふも the little といふとは各異なりたる意義となる、即ち左の如し

(一) little これは not much の意味にして否定の形容詞なり、He has *little* money. と云はゞ「彼れは多くの錢を持たず」の意なり。

(二) a little これは some at least の意味にして肯定の形容詞なり、He had *a little* money. と云はゞ「彼れは、量は少くとも兎に角幾何かの錢を持ちき」の意なり。

(三) the little これは否定と肯定とを共有す、He spent *the little* money he had. と云はゞ「彼れが持ちし錢は多からざりき」といふ否定と「彼れは持ちしだけの錢を悉く費せり」といふ肯定の意味と双方結合したるやうの意となる、即ち「彼れが持ちし錢は多からざりしが、兎に角彼れは持しだけの錢を悉く費せり」の意なり。

六七 數形容詞 (Numeral Adjectives) とは如何

答 事物の數の幾何なるかを表はす形容詞にして many, few, certain, several, each, every either, neither 等の加き是なり、又 some, any, no, all 等の量形容詞も次ぎに來るものが普通名詞にして複數とならば、其時は數形容詞と見做さるゝなり。即ち *Some* men

die young. Did you read *any* books? *No* mourners attended his funeral など云ふ場合は數形容詞なり。

六八　數形容詞には如何なる種類ありや

答　數形容詞は定數形容詞、不定數形容詞の二種に概別せらる、定數形容詞は正確なる數を表はす one, first, single, two, second, double 等の類是なり、不定數形容詞は正確に數を表はさゝるものにて、all, some, meny, few, several, none, enough 等は其主なるものたり。

六九　定數形容詞の原數詞(Cardinals)序數詞(Ordinals)とは何ぞ

答　定數形容詞の中にて、數の幾何なるかを示すものを原數詞といひ、事物の定むる順序を示すものを序數詞と云ふ、one, two, three 等は原數詞にして、first, second, third 等は序數詞なり、又 single, double, twofold, fifsfold 等は別に倍數形容詞の名あり。

七〇　不定數形容詞 Few の用法を問ふ

答　few は確かに數を示さずに小數を意味する形容詞なれども單に few といふと a few

といふと又 the few といふとは各異りたる意味を表はす、卽ち左の例の如し

(一)　few　これは not many の意にして否定の形容詞なり、He read *few* books. といふ時は「彼れは多くの書物を讀まざりき」の意なり。

(二)　a few　これは some at least の意にして肯定の形容詞なり、He read a *few* books. といふ時は「縱令數は多からずとも、彼れは兎に角書物を讀みき」の意なり。

(三)　the few　これは肯定〻否定と双方の意味を有す、He read *the few* books he had. といふ時は、「彼れが持ちし書物は多からざりき」と云ふ否定と「彼れは持ちたるだけの書物は悉く讀みたり」といふ肯定と双方の意味を結合したる意となる、卽ち「彼れは多くの書物は持たざりしが、兎に角持ちしだけの書物は悉く讀みたり」との意なり。

七一　不定數形容詞 many の用例を擧げよ

答　many は正確に數を指さずして多數の意を表はす形容詞なるが、單に many と用ふるが尋常なれど、又 many a 若くは a many の如く片句となりて用ひらるゝことあり、many a といふ場合は次きに來る名詞は單數にして a は one と同意味なり、卽ち many a man は「一人を多數」といふ意義にして結局 many men と同じ、又 a many といふ場合

は次ぎに來る名詞は複數にして、此片句と次ぎの名詞との間に of が略されたるものなり、*a many men* の如し、されどこは重に韵文に用ひられ、散文には普通此場合に *a* と *many* との間に *great* なる語を挿入し、*a great many men* となすなり。

七二　代名形容詞 (Pronominal Adjectives) とは何ぞ

答　代名形容詞とは代名詞より出でゝ、形容詞の働らきをなす詞を云ふ、*this, these, that, those, yon, yonder, such, the same, self-same, very same, what, which* 等の如き是なり、是等皆單獨に見ては代名詞と形異なる處なけれども、文中に在りて代名詞としては單獨に用ひ得られて、後に名詞を要せざるに、代名形容詞としては、必ちず其後に名詞が來るなり、(尤も或場合には却つて形容詞が名詞の後に付くこともなきにあらず)例へば *This is a good book.* とゝ云ふ時は *this* は代名詞なれども、*This book is good.* といふ場合には、代名形容詞となれるなり。

七三　代名形容詞 this, that, such, same の用例を示せ

答　This (其複數 *these* も) は手近に在るものを指し、人にも物にも適用す、*this* man, *these* men 等の如し、that (其複數 *those* も) 較離れたる人又は物を指示す、*that* man, *those* trees 等の如し、*such* は「斯樣なる」若くは「彼の樣なる」の意を表はす、*such* a man

such men 等の如し、又 *same* は前に說き示したる事物に關係す、You told him to come here tomorrow; and I gave him the *same* answer. の如し。

七四　左の六種の文章に於ける what, which, は孰れが代名詞にして、孰れが代名形容詞なるか、又代名詞のものは何種の代名詞に屬するかを示せ

(一) *What* do you want?
(二) *What* book do you want?
(三) I can not give you *what* you want.
(四) *Which* of these will you take?
(五) *Which* book will you take?
(六) The book *which* you read was good one.

答　(一)(三)(四)(六)に在るものは代名詞(此中(一)と(四)は疑問代名詞に屬し、(三)と(六)とは關係代名詞に屬す)にして、(二)と(五)とは代名形容詞なり、

七五　左の例は何種の詞なるか

The horse is *lame*. A *fallen* tree.
A *river* fish. A *Bathing* place.

答 右の例に於ける草體字のものゝ中、最初の lame は形容詞にして、斯樣に用ひらるゝ場合を間接用法と云ふ、其他のものは形容詞に非ざれども斯樣に用ひらるゝ時は、恰も形容詞の如く名詞の意味を制限するが故に形容詞の代用言と見做さるゝなり。

七六 形容詞の比較 (Comparison of Adjectives) とは如何

答 性質若くは分量の度合を表はす爲めに或形容詞に變化を與ふることを比較と云ふ、比較には三級あり、原級(positive degree)比較級(comparative degree)最上級(superlative degree)是なり、原級とは單一に性質を表はすもの、比較級とは同種の二物を比較し、一方よりは一方が一層高き性質を有するといふことを形容するに用ふる形、最上級とは三個以上の物を比較し、其中にて最高度の性質を表はす形也、而して其變化には語尾を變ずるものと、語尾を變ぜずして前に別の一語を添加するものとあり、例左の如し。

原級 A *strong* animal. A *beautiful* flower.
比較級 A *stronger* animal. A *more beautiful* flower.
最上級 The *strongest* animal. The *most beautiful* flower.

七七 比較の諸級を有せざる形容詞ありや

答 比較諸級を有するものは主に性質形容詞にして、外には much と little の二種の量形容詞 many と few の二種の數形容詞のみなり、其他の量形容詞、數形容詞、及び汎べての固有形容詞、指示形容詞等は比較の諸級を有せず。

七八 比較の變化を作る法則を問ふ

答 一連音にてなる形容詞は、大概其比較級を作るには語尾に er を加へ、最上級を作るには est を加ふ、(但し原級の語尾が e にて終らば單に、比較級に r 最上級に st を付す) great, greater, greatest; noble, nobler, noblest の如し、又二連音以上にて成る形容詞は大概語尾を變化せずして、其前に、比較級には more 最上級には most を添加する定めなり、尤も二連音のものゝ例に依りて語尾を變化するものなきにあらざれどそは僅少なり。又上記二種の外不規則に變化するもの若干あり。

七九 比較の不規則なるものを擧げよ

答 比較級、最上級を作るに不規律なる形容詞若干あり左の如し

原級	比較級	最上級

good	better	best
Bad, ill, evil	worse	worst
Fore	former	farmost, first
Hind	hinder	hindmost
Late	later (latter)	latest(last)
Little	less	least
Much	more	most
Many	more	most
Near	nearer	nearest, next
Old	older(elder)	oldest(eldest)
Far	farther(further)	farthest(furtlest)

右の中正則、不規則兩樣の形を有するものあるを見るべし、late, old, far 是なり、是等は正則の形を用ゐる時と不規則の形を用ゐる時と意義を異にす、(原級は勿論同意味なり) 即ち late に就て云はゞ、其比較級最上級を later, latest とせば時を表はし、latter, last とせば位置を表はす、This is the *latest* news. (最近の新聞の意) This is *last* boy in the class. (級の末席の少年) old の elder, eldest は my *elder* brother, my *eldest* son の如く、人にのみ用ひられ(殊に強き老齢を意味せずして先に生れたるを意味す、例へば my *eldest* son died at the age of twelve 等を云ひ得べきが如し) older, oldest は人にも物にも適用せられ老齢を意味す This is the *oldest* tree in the grove. の如し、又 farther, farthest は二ケ所の間の遠き方の距離を表はし、further, furthest は附加物或は前面の物を表はす、Osaka is *farther* from Tokyo than kyoto is. The *further* end of the room. の如し

八〇 比較級の用法を問ふ

答 比較級は一事物の性質の他の事物に比して優れることを表はすものにて、通常は其後に than の詞を用ゐ、但し than なくして of the two の語ゐることあり、此場合には其比較級形容詞の前に the を置す、例左の如し、

John is *taller than* James. John is *the taller of the two*. John is *more active than* James. John is *the more active of the two*.

八一 最上級の用法を問ふ

答 最上級は數多ある事物の中にて一事物が優れたることを表はすものにて、これには常に the なる冠詞を附する定なり、用例左の如し、

John is *the tallest* boy. John is *the most active* boy.

八二 形容詞は如何なる場合に於て名詞の後に來るか

答 形容詞は名詞の前に在ること普通なれど、亦後に在ることもあり、そは尺度若しくは年齢の度を有する形容詞の場合、又形容詞が其意味を完全ならしむべき他の語を有する場合なり、即ち左の如し、

A hero *worthy of old times*. A tree *sixteen feet high*.
A boy *twelve year old*.

八三 名詞として用ひらるゝ形容詞の例若干を擧げよ

答 形容詞に冠詞を附し又は複數になして名詞として用ふる場合あり、nobles（貴人）A German（ゼルマン人）等の如し、The English（英國人）The French（佛國人）等皆同じ、其他 opposites, morals, contraries, particulars, valuables, eatables, moderns 等皆名詞として用ひらる。

第五章 冠詞

八四 冠詞（Articles）の種類及効用を問ふ

答 冠詞は實は形容詞中の一種に屬すべきものにして、其數三個あり。a, an, the 是なり、a 若くは an を不定冠詞と稱し the を定冠詞と稱す、効用は他の形容詞と同じく、名詞に或意義を附加し、名詞の適用を制限するなり。

八五 不定冠詞を説明せよ

答 不定冠詞 a 若くは an は人又は物の同種類中、何れにもあれ、或一個を指示する意にて、特に是れ若くはそれと撰擇する意にあらず a tree, a man 云はゞ、只或る一個の木若くは一個の人と指したるまでにて、更に何れの木何れの人と選んで指示したるにあらず（an は a と同義なり、唯次ぎに來る名詞に依りて異にするだけなり、後に説くべし）代名詞 one と同じなれど意義稍弱し。又冠詞は通常普通名詞の前に用ひ、固有名詞、物質名詞、無形名詞の前には用ひず。

八六 不定冠詞 a, an の使用上の區別を問ふ

注 a は普通次ぎに來る名詞が子音にて始まる場合に付く、a man, a boy, a husband, a year, a woman の如し、尤も母音にて始まる語なりとも、恰かも子音の y 又は w の如く發音すべき場合には a を付す、a useful book, a one-eyed woman の如し。an は通常次ぎに來る名詞が母音にて始まる場合に付く、但し子音の h にて始まる語にて其 h が響かざる場合にも an を付す。an apple, an eye, an inkstand, an hour, an honour の如し。

八七　定冠詞 The の特質を問ふ

注 the は a 若くは an と異にして、或特殊の一物を正確に指示する意あり、指示代名詞 that の如くにして其力稍弱し、the を用ふる時は話しかけられたる人が、其指示せる物の如何なる種類なるかを知り、又何れの物を指したるかを知り得るなり、a book と云はゞ何れとも指さず只一の書物の意なれども the book と云はゞ、ソノ書物、又はコノ書物と或特殊の書物を指す意となるなり。

八八　The の用例數種を擧げよ

注 the は通常普通名詞が複數となりたる場合には付せざる例なれども、殊に他と區別して指示する場合には付することあり、Look! *the dogs* are running. の如し又固有名詞は冠詞を付せざる例なれども、本來の意味變じて普通名詞となりたる場合には付す

ることあり、he is *the* Milton of the age. (彼れは現時の大詩人なりの意)の如し、一個體が其種類全體の代表となる時は the を付す、The lion is the king of beasts の如し、但し人には普通付せず、固有名詞中人物の名は若し形容詞を付せば其形容詞の前に the を付す、The famous washington の如し、morning, evening, afternoon, daytime, dark, light, east, west, north, south, right, left, world, earth, sun, moon, sea, sky 等は定冠詞を付する例にして、spring, summer, autumn, winter には付する時も付せざる時もあり、十二ヶ月の名及び七曜日の名には通常付せざる例なり。

八九　固有名詞にして定冠詞の付く例を擧げよ

注 上項の中に擧げたる例は固有名詞本來の意義變じて普通名詞となれる場合なるが、眞の固有名詞(元意義の儘の)にして、定冠詞を付する例となれるもの若干あり、左の如し、

(一) 河流の名　The Ganges, the Indus, the danube 等

(二) 群島の名　The East Indies, The Hebrides 等(但し個島には付するものなし、Ceylon, Ireland の如し)

(三) 山脈の名　The Himarayas, the Alps, the Vindhyas 等(但し個山には付せざるものなし Mount Alu, mount Everest の如し)

（四）海峡、灣、海、大洋の名等　The Palk straits, the Persian Gulf, the Arabian sea, the Indian ocean 等

（五）書籍の名　The Bible 等（かれど著者の名にて書を呼ぶものは冠詞なし）而して the の付おれるは都市の名（Tokyo, Paris 等）岬の名（Cape Horn 等）國の名（Japan, China 等）大陸の名（Asia, Europe 等）個島の名（Sicily, Malta 等）個山の名（Mount Everest 等）湖水の名（Lake Chilka, Lake Huron 等）

第六章　動詞

九〇　動詞（verbs）の種類及其特質を問ふ

答　動詞を別ちて三種とす、（一）他動詞（Transitive verbs）（二）自動詞（Intransitive verbs）（三）助動詞（Auxiliary verbs）是なり、他動詞とは其表はせる動作が動作者のみに終らずして他のものにも及ぶ時の動詞を云ひ、其動作の向けらるゝものを賓語（又は目的）と名く、自動詞は其表せる動作が動作者のみに止りて他に及ばざる時の動詞を云ふ、又助動詞とは他の動詞の「時」を示し或は其の意味を制限する爲めに用ふる動詞を云ふ

（一）The man *killed* a snake.　（二）The sun *shines*.　（三）I *may* sleep. I *will* work. *Did* you speak?

上例中（一）の killed は他動詞にして（a snake は其目的）（二）の shines は自動詞、（三）の may, will, did は助動詞、（sleep, work, speak は自動詞）なり、斯く助動詞に助けらるゝ場合の動詞を主動詞（又は本動詞）と云ふなり。

九一　他動詞の目的（Object）即ち賓語には如何なる種類ありや

答　上項の中に擧げたるは單獨なる賓語を有する場合の例なるが、其他他動詞の目的は種々の形にて言ひ表はさるゝこと左の如し、文中草體字は皆賓語なり

The man struck the *dog* with his stick.

The man lifted *me* up out of the water.

He desires *to leave* us tomorrow.

He disliked *sleeping* in the day-time.

No one knew *how to make* a beginning.

九二　直接賓語 (Direct object) 間接賓語 (Indirect object) とは如何

答　他動詞は通常一個の賓語を有すれども、中には二個を有するものあり、二個を有する場合には一は物の名、一は人若くは他の或動物の名なるを常とし、又其人若くは動物の名が始に來り、物の名は後に來るを常とす、此の始めに來る賓語（即ち人若くは他の動物の名）を間接賓語と稱し、後に來る賓語（即ち物の名）を直接賓語と稱す、例へば

The teacher gave the *boy* a *book*.

なる文章に於て boy は間接賓語にして、book は直接賓語なり、然るに時としては直接賓語が前に置かれ、間接賓語が後に置かるゝことあり、此場合には間接賓語の前に for 又は to の前置詞あり、即ち左の如し

The teacher gave a book *to* the boy.

九三　左の各例に就て直接賓語と間接賓語とを指摘せよ

(一) I forgave him his faults. (二) Thay sold two apples to him. (三) The affair caused her much trouble. (四) I have asked you a question.

答　(一)の him (二)の him (三)の her (四)の you は間接賓語にして (一)の his faults (二)の two apples (三)の trouble (四)の a question は直接賓語なり、又右の中(一)(三)(四)は何れも間接賓語が始に來りたれども、(二)に在りては後に置かれたり、而して其前に to なる前置詞あり。

九四　他動詞が補充辭 (Complement) を有する場合を問ふ

答　一賓語を有する他動詞なるも、其賓語を完全ならしめんが爲めに別他語を要する場合あり、例へば They made him *king*. Thay found her *still sleeping*. なる文章に於

て第一の文の king は made の補充辭、第二の文にては、still sleeping は found の補充辭なり。

九五　他動詞が自動詞となり得ることあるや

答　あり、これは動詞が賓語に就て考へられざるが如き意義に用ひらるゝ時か、或は合成代名詞の省畧せらるゝ時なり、例へば Men *eat* to preserve life. He *drew* near me. の如し、此例にては eat は「物を食ふ」の意味に用ひられ drew は「彼自身を引きぬ」の義に用ひられたるなりあり。

九六　自動詞が補充辭を要する場合ありや

答　あり、自動詞は通常其れ自身にて十分の意義を成すものなれども、中には其れ自身のみにて完全ならざるものあり、是等は其次ぎに名詞又は形容詞を附して始めて完全の意義となるなり、例へば He *is* a merchant. The dog went *mad*. The man *has* fallen *sick*. 等の如き、皆自動詞は其次ぎに補充語を有するを見るべし。右の如く自動詞の補充辭は通常其後に置るれども、時として其前に置かるゝことあり、*Strait* is the *gate*.(此門は海峽である) *Narrow* is the way (此路は狹くある)の如し、

九七　自動詞の次ぎに名詞の來る場合の例を擧げよ

欠

MISSING

have（二人稱複數） He *has* She *has* It *has*（三人稱單數） They *have*（三人稱複數）

一〇四 左の文章を複數の形に變ぜよ

（一） He sees the sun rising.

（二） That boy is a good boy.

（三） I see a old man coming.

（四） Has that woman a child ?

（五） Does this knife cut well ?

答 左の如し

（一） They see the sun riseng. （二） Those boys are good boys. （三） we see old men coming. （四） Have those women children ? （五） Do these knives cut well ?

一〇五 動詞の時 (Tense) を問ふ

答 時とは動作の時限を表はすものにして、三種の主なる形あり、即ち現在(present)過

去(past)未來(Future)是なり、現在は動作が現在時に爲さるゝを示し、過去は過去時に爲されたる動作を示し、未來は動作が未來時に爲さるゝを示すものにして、即ち左の如し、

現在	I *am*.	He *comes*.	She *goes*.
過去	I *was*.	He *came*.	She *went*.
未來	I *shall be*.	He *will come*.	She *will go*.

一〇六　各「時」に對せる四種の異なれる形體を問ふ

答　「各」時に對する四種の異れる形體とは(一)不定(Indefinite)(二)進行(Progressive 又 Continuous)(三)完了(Perfect)(四)完了進行(Perfect progressive 又 perfect continuous)是なり。不定とは各「時」が最も簡單なる形體にて表はさるゝものにて即ち

I love.(現在)　I loved.(過去)　I shall love.(未來)

の如きもの、進行(繼續又は不完了とも稱す)とは、各「時」が尙引續きつゝありて、未だ完了せられざる意を表はすものにて、即ち

I am loving.(現在)　I was loving.(過去)　I shall be loving(未來)

の如き是なり、完了は各「時」に在る事柄が充分に完了せる意を表はすものにて即ち

I have loved.(現在)　I had loved.(過去)　I shall have loved.(未來)

欠

MISSING

Forget	forgot	forgotten
Wear	wore	worn
Awake	awoke	awaked
Buy	bought	bought

一一〇　助動詞(Auxiliary verb)とは如何

答　助動詞とは動詞に添ひて用ひられて始めて意義を成すものにして、單獨にては意義を成さゝるものなり、助動詞の主なるものは be, have, shall, will, do, may, can, must 等なり、尤も此中にて be, have, will, do は動詞として單獨に用ひられて意義を成す場合もあれど、其他のものは專ら助動詞にのみ用ひらる。

一一一　Have が動詞たる時と助動詞たる時の別を示せ

答　動詞(他動詞)として用ひらる、場合は所有の意味を有し、助動詞として用ひらる、場合は他の動詞を助けて過去時を表はす例左の如し

動詞　I *have* a book. (余は一冊の書物を所有す)

助動詞　I *have* bought a book (余は一冊の書物を買ひ)

一一一一　助動詞の Shall, will の變化を示せ

答 左の如し表中1は一人稱に2は二人稱、3は三人稱なり

		(1)	(2)	
Shall	單數 現在	I *shall*	thou *shalt*	he *shall*
	過去	I *should*	thou *shouldst*	he *should*
同上	複數 現在	We *shall*	you *shall*	they *shall*
	過去	We *should*	you *should*	they *should*
will	單數 現在	I *will*	thou *will*	he *will*
	過去	I *would*	thou *wouldst*	he *would*
同上	複數 現在	We *will*	you *will*	they *will*
	過去	We *would*	you *would*	they *would*

一一三 Shall と Will の意義の區別を問ふ

答 shall と will は二つとも「アラウ」と譯詰して未來を表はせども、其意義は較異なり、況べて未來を表はすには三種の意味あり(一)單に未來といふことを表はすだけにて他に何の意味なき場合(二)未來の意に命令約束脅迫の意を含ませる場合(三)未來の意に企圖の意を含ませる場合是なり、若し此(一)の場合ならば、一人稱には shall を用ひ二人稱三人稱には will を用ふ"I shall love, we shall love, you will love, they will love. 等の

如し、又(二)の場合ならば二人稱三人稱の will の代りに shall を用ひざるべからず(自からも己れに命令するとはなきが故に此場合一人稱はなし) he shall have it. You shall cease from your toil. の如し、又若し企圖の意味を未來に含ませる即ち(三)の場合ならば一人稱の shall の代りに will を用ひざるべからず。以上は一般の法則なり、猶他にも異りたる用例あれど、茲には畧す又 should は shall と will の過去形なれば推して知るべし。

一一四 May と Can の意義の區別を問ふ

答 may (過去形は might) can (過去形は could) は共に「能ふ」と譯すれども意義に於ては較異なり、即ち左の如し

may の用例に四種なり

(一) 許可の意 you *may* leave the room. (汝は此室を去りて可なり)

(二) 成し得べき事、有り得べきことを示す意 I *might* do it, if I tried. (余は試みたらばそれを爲し得ん)

(三) 願望の意 *May* heaven protect thee. (天が汝を保護せんことを祈る)

(四) 目的の意 I worked hard that I *might* win. (勝たん爲めに努めて働らき)

can には二種の用例あり

（一） 勢力又は能力の意　I *can* write well.（余は好く書く能力あり）

（二） 許可の意　You *can* go or not, as you like.（汝は行くも可、行かぬも可、随意なり）此場合に於ては may と同じ。

二五 直接法に於ける動詞の三時と十二形とを示せ

答 左の如し

（一） 能動態 (active voice)

形	現在時	過去時	未來時
不定	I love	I loved	I shall love
進行	I am loving	I was loving	I shall be loving
完了	I have loved	I had loved	I shall have loved
完了連續	I have been loving	I had been loving	I shall have been loving

（二） 所動態 (passive voice)

形	現在時	過去時	未來時
不定	I am loved	I was loved	I shall be loved
進行	I am being loved	I was being loved	欠
完了	I have been loved	I had been loved	I shall have been loved
完了連續	欠	欠	欠

二六 直接法不定形の變化を示せ

答 左の如し

（一） 能動態

		單數	複數
現在	第一人稱	I love	We love
	第二人稱	Thou lovest	You love
	第三人稱	He loves	They love
過去	第一人稱	I loved	We loved
	第二人稱	Thou lovedst	You loved
	第三人稱	He loved	They loved
未來	第一人稱	I shall love	We shall love
	第二人稱	Thou wilt love	You will love
	第三人稱	He will love	They will love

（二） 所動態

		單數	複數
現在	第一人稱	I am loved	We are loved
	第二人稱	Thou art loved	You are loved
	第三人稱	He is loved	They are loved
過去	第一人稱	I was loved	We were loved
	第二人稱	Thou wast loved	You were loved
	第三人稱	He is loved	They were loved
未來	第一人稱	I shall be loved	We shall be loved
	第二人稱	Thou wilt be loved	You will be loved
	第三人稱	He will be loved	They will be loved

一一七　助動詞 Do の用法を問ふ

答　助動詞としての do（三人稱單數現在の時は does）及び其過去 did は下の三種の目的にて直說法に用ひらる、（一）語勢を强むる爲め、例へば I *do* love. I *did* love の如し、これは I love. I loved よりは語勢强し、（二）not なる語を入れん爲め、即ち否定の意を表す爲め例へば I *do not* love. I *did not* love. の如し、これは I love not. I loved not より優れり、（三）問ひを發する爲め、例へば *Does* he come? Did he not love? Do you go? 等の如し、而して do 及び did が文中の位置に就ての規則は、問ひを發する場合に用ふる時は、動詞の主語として用ひらる、名詞若しくは代名詞は do 及び did の後に來りて前には來らず、Do you love? Did he not love? の如し、されど語勢を强むる爲めか又は not と共に用ひらる、時は名詞又は代名詞は動詞の前に來りて後には來らず、例へば I do love. I dia not love の如し。

一一八　疑問文及否定文は如何にして作るか

答　疑問文は助動詞を主格の前に置き否定文は助動詞と動詞との間に not を置きて作る例左の如し

疑問文
- *Are* you *studying* English?
- *Have* you *written* your exercise?
- *Shall* you *go* to Osaka to-morrow?

否定文
- I *am not studying* English.
- I *have not* written my exercise.
- I *shall not go* to Osaka tomorrow.

但し上例は助動詞 be, have, shall, の場合なるが、又助動詞 do を用ひて疑問文及否定文を作ることあり（上項參照）do を用ふるは現在不定及び過去不定の「時」なり、元來現在不定及過去不定の動詞は助動詞を添へずして作るもの故、疑問若しくは否定の文とする場合

には do を添ふる必要あるなり、即ち左の如し。

疑問文 { *Do* you *go* to the school ?
Did he *write* this book ? 」

否定文 { I *do not go* to the school.
He *did not write* that book.

一一九 現在不定(Present indefinite)の特別用法を問ふ

過去現在未來の三時には各四つの形體ありて、不定、進行、完了、完了進行と呼はるゝことは上に述べたり、

答 現在不定なるもの、特別用法は過去現在未來に亘りて等しく眞實なることを示す、例へば The sun *shines* by day. (大陽は昼に輝く) Twice two is four (二つの二倍は四つなり) の如く、凡べての時に亘りて動くべからざる眞實を現在時を以て表はすなり、又 He *works* hard. He *has* good health. He *is* a fine singer. 等の如く活物の特性、人の性質等其他何物にても變ぜざる規則的のものは皆これにて表はすなり。

一一〇 過去不定 (Past indefinite) と現在完了(Present perfect) を説明し例を擧げよ

答 過去不定は曾て眞實にてありし事なれど、今は過ぎ去りしことを示し、現在完了は今丁度終りたる動作か又既に完了したる事を現在時と結合する場合等に用ふ例左の如し。

過去不定 I *expected* you last-night.
現在完了 { He *has sent* the letter
I *have lived* twenty years in Tokyo.

此二種は混合し易き故注意するを要す、上例不定過去の方は昨夜汝を待つといふ眞實の事が今は過去となれる意、現在完了の第一は丁度手紙を發送したる場合の意を表はし、第二は二十年前より東京に棲み始め、今も尚棲みつゝあるの意なり、されば文中に過去を示す副詞又は成句ある時は、過去不定を用ひ決して現在完了を用ふべからず、上に掲げたる過去不定の例中の last-night なる語に注意せよ。

一一一 過去完了(Past perfect)一名大過去の特別用法を問ふ

答 過去に於ける他の動作の始まる前に一の動作の完了せられたることを示す、例左の如し。

He *had seen* many foreign countries before he *returned* home.

The sheep *fled* in great hasty for a wolf *had entered* the fold

一二三 接續法の變化を示せ

答 接續法不定の過去現在未來は能動態に於て左の如く變化す、

		單數	複數
現在	第一人稱	If I love	If we love
	第二人稱	If thou lovest	If you love
	第三人稱	If he love	If they love
過去	第一人稱	If I loved	If we loved
	第二人稱	If thou lovedst	If you loved
	第三人稱	If he loved	If they loved
未來	第一人稱	If I should love	If we should love
	第二人稱	If thou shouldst love	If you should love
	第三人稱	If he should love	If they should love

所動態に於て通常用ひらるゝ接續法形は唯不定及び完了の二つなり、左の如し

	不定	完了
現在	If I be loved	If I have been loved
過去	If I were loved	If I had been loved
未來	If I should be loved	If I should have been loved

一二三 命令法に變化ありや

答 命令法は第二人稱の現在に於て用ひらるゝのみにして形左の如し

單數	Speak thou (語せ汝)	複數	Speak you (語せ汝等)

されど普通 thou 又は you を省畧し、單に Speak.(語せ) Please, give me some bread. (何卒幾らかの麵麭を余に與へよ) 等の加く用ふ、此法の第一人稱及び第三人稱を表さんとする時には let なる助動詞を用ふ、即ち左の如し

	單數	複數
第一人稱	Let me speak.	Let us speak.
第三人稱	Let him speak.	Let them speak.

又禁止の意を表はすときは、命令法は do なる助動詞にて形成せらる、Do not speak.(語しなすな) の如し。尤も do なしの時もあり、Never mind(決して心配すな)の如し。

一二四 不定法の變化を示せ

答 不定法は他の三法と趣きを異にし、實は動名詞ともらふべきものにして、文章の主

格又は助動詞の賓格に用ひらるゝものにて例へば *To write* is not easy.(書くことは容易にあらず) I am learning *to write*. (余は書くことを學びつゝあり)の文中に於て草體の個處がそれなり、不定法には其形四つありて皆現在時なり、即ち左の如し

	能動態	所動態
不定	To send	To be send
進行	To be sending	欠
完了	To have sent	To have been sent
完了進行	To have been sending	欠

二二五 分詞(Participle)の種類を問ふ

答 分詞には現在、過去、完了の三形あり(凡べての動詞には皆此三分詞あり)現在分詞とは -ing の語尾を有するもの、過去分詞とは-ed -t -en等の語尾を有するものなり、(但し不規則動詞は形異なり)分詞の形左の如し。

他動詞

	能動態	所動態
現在若くは進行	Loving	Being loved
過去	欠	Loved
完了	Having loved	Having been loved

自動詞

現在若くは進行	Fading
過去	Faded
完了	Having faded

二二六 分詞の性質を問ふ

答 分詞は動詞にて又形容詞の性質を有す、所動態の凡べての「時」は to be の後に過去分詞を用ひて形成せらる、I am loved, I was loved, I shall be loved. の如し、又能動態の進行は to be の後に現在分詞を用ひて形成す I am loving, I was loving, I shall be loving の如し、能動態の完了は to have の後に過去分詞を用ひて形成す I have loved, I had loved, I shall have loved の如し、又形容詞としては性質形容詞に屬し、名詞を形容し、副詞にて形容せられ、比較級の形を取り、又名詞として用ひらるゝことを得。

二二七 左の文中の分詞を指示せよ

(一) Being tired of work, the man went home.

(二) The man was picked up in an almost

dying state.

(三) This flower is more faded than that.

(四) None is so soon forgotten as the dead.

答 にては being tired (二)にては dying(三)にては faded(四)にては dead

一二八 名動詞(Gerund)の種類を問ふ

答 名動詞に四つの形あり左の如し

	能動態	所動態
現在若くは進行	Loving	Being loved
完了	Having loved	Having been loved

一二九 名動詞と分詞とは如何なる差違ありや

答 名動詞と分詞とは形に於て全く同じ、されど名動詞は名詞の一種にして分詞は形容詞の一種なり、性質全く異なれり。左に例を示さん。

(一) 名動詞 He is fond of *sleeping* (彼は眠ることを好めり)

(二) 分詞 I see a man *sleeping*.(余は眠れる人を見る)

(一)に於ては「眠る事」といふ名詞の資格となり「二」に於ては「眠れる」といふ意となりて a man を形容する形容詞の資格となれるを見るべし。

一三〇 名動詞用法の種類を問ふ

答 名動詞は名詞の一種なるが故に、或動詞の主語若しくは賓語(目的)となり、又補充辭となり、前置詞の賓語(目的)ともなる、左例(一)は動詞の主語となり(二)は動詞の賓語となり(三)は動詞の補充辭となり(四)は前置詞の賓語となれり。

(一) *Sleeping* is necessary to life.

(二) He enjoyed *sleeping* in the open air.

(三) His almost constant habit was *sleeping*.

(四) He was fond of *sleeping*.

一三一 左の文章中の草體字に就て名動詞と分詞とを區別せよ

(一) We heard of his *coming* back today.

(二) The boy *having won* a prize was much

praised.

(三) He was in the habit of *boasting* of his cleverness.

(四) A *boasting* man is much despised.

答 (一)と(三)に在るものは名動詞にして、(二)と(四)とにあるものは分詞なり。

一三二 左の文章の動詞を解剖せよ

(一) I shall go home, but you will stop here.

(二) Take a seat on this bench.

(三) Having done his work, the man went home.

答 左の如し

(一) shall go は自動詞、一人稱、單數、未來時、to go なる動詞の直說法にして、I なる主語と一致せり、will stop は自動詞、二人稱、單數、未來時、to stop なる動詞の直接法にして、you なる主語と一致す、

(二) take は他動詞、二人稱、單數、to take なる動詞の命令法にして、省略せられたる you 又は thou なる主語と一致す、

(三) having done は他動詞の to do なる動詞の完了分詞にして man なる名詞を形容す

一三三 主文章及屬文章とは何ぞ

答 二文章が或一つの接續詞、代名詞若くは副詞にて連結せらるゝ時、一を主文章(又は屬章)と云ひ他を屬文章(又は主章)と云ふ、例へば I would do this, if I were allowed. なる文章に於て、I would do this. は主文章にして、其以下は屬文章なり。

一三四 主文章屬文章の時の用法を問ふ

答 通則として、主文章過去時ならば屬文章も過去時ならざるべからず、されど主文章に現在若くは未來あらば、屬文章は如何なる時にても可なり、卽ち左の如し

主文章	屬文章
(一) He *had been* ill two days,	when the doctor *was sent* for.
(二) I *know* (or I *shall know*)	that he *read* a book. / that he *will have read*. / that he *had been reading*.

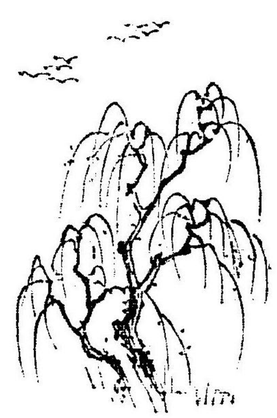
上例は通則なれども、主文章に過去ありて而も屬文章に現在不定を用ふるを許すことあり、それは最も普通なる常習的事實を表はす場合なり、即ち左の如し

He *was* glad to hear, that his brother *is* industrious.

又屬文章に may（現在）を用ふる場合は主文章は現在若くは未來なるべく、屬文章に might（過去）を用ふる場合には主文章も過去なるべし、

He *comes*, that he *may* see me.
He *will come*, that he *may* see me.
He *had come*, that he *might* see me.

又接續詞 than にて連結せらるゝ場合は、「時」は通常如何なるものにても可なり。



第七章　副詞

一三五　副詞の性質及種類を問ふ

答 副詞の性質は第八問の條下に解せり、副詞を別ちて三とす、（一）單一副詞（Simple adverb）（二）疑問副詞（Interrogative adverb）（三）關係副詞（Relative adverb）是なり。

一三六　副詞の三種を説明し例を擧げよ

答 單一副詞とは最普通に見ゆる簡單なる副詞にて now, then, already, soon, in, out, very much 等其他夥し、疑問副詞とは、問ひを爲さんが爲めに用ひらるゝ副詞にして、how, when, why の類なり、又關係副詞とは疑問副詞と形は同じけれど、用法は異にして、恰も關係代名詞の働ちきの如く、二つの文章を結合する副詞なり、左に三種の副詞の用例を示さん。

（一）單一副詞の用例

He will *soon* come.　　He did his work *slowly*.
He did this *once*.　　He did it *thus*.

（二）疑問副詞の用例

When did he come ? *How* often did he come ?

Why did he come ?

（三） 關係副詞の用例

This is *where* we dwell. He knew it *when* nobody else knew it.

That is the reason *why* I can not consent.

This is *how* he treats me.

一三七 副詞の分類を問ふ

答 副詞を大別すれば前項の如く三種となれども、又便宜上、他の方面より見て況とを通じて數種の分類を作れり、即ち、（一）時の副詞、（二）場所の副詞、（三）量、程度の副詞（四）方法或は性質の副詞等是なり、（猶他にも數種の分類を作るも役）左に其例を示さん、

（一） 時の副詞 Now, to-day, instantly, before, already, once, soon, yet, never, again.

（二） 場所の副詞 Here, there, hither, whither, hence, thence, far near, away,

（三） 量、程度の副詞 Much, little, greatly, very, partly, exceedingly,

（四） 方法、性質の副詞 Well, ill, wisely, foolishly, bravely, softly, slowly,

一三八 副詞の比較法を問ふ

答 副詞の中には形容詞の如く比較の三級を有するものあり、之を作るの法は全く形容詞と同じ、soon, sooner, soonest; late, later, latest, wisely, more wisely, most wisely の如し、又不規則なるものあり、well, better, best; much, more, most 等の如し。

一三九 副詞句とは如何なるものぞ

答 副詞句とは數語の結合して副詞の用をなすものにて、名詞に前置詞をつけれは、前置詞と名詞と混化して成れるものあり、又前置詞の後に形容詞をつけの等其他數種あり、左に通常に副詞句と名づくるもの數種を擧ぐべし。

of course. at length, in fact, in general, in short, mean-time, by all mean, by the by, by the way, to be sure, topsy turvy, to-day,（此終りの一つは名詞と前置詞と結合したるものなり）

一四〇 形容詞と形同一なる副詞の例を擧げよ

答 much, early, long, near, little, only等は副詞の時も形容詞の時も形同一なり。

一四一 左の諸例に就て形容詞と副詞とを區別せよ

（一） He spoke *loud*.

(二) He has *loud* voise.

(三) He came *early*.

(四) He came at an *early* hour.

註 (一)と(三)とは副詞にして(二)と(四)とは形容詞なり、何となれば前者は動詞を形容し、後者は名詞を形容すればなり。

一四二 文中に於ける副詞の位地を問ふ

答 形容せらるゝ語が、形容詞、副詞、前置詞、接續詞ならば、之を形容する副詞は通常其直ぐ前に置かる

Your hat is too *large* for your head.

He walks *very* slowly.

He arrived *long* before the time.

Tell me *precisely* how it happend.

の如し、又動詞が自動詞の場合は副詞は直ちに其後に來れども、他動詞ならば其前か若くは賓語の後に置かる

He works *slowly*.

The man struck his dog *angrily*.

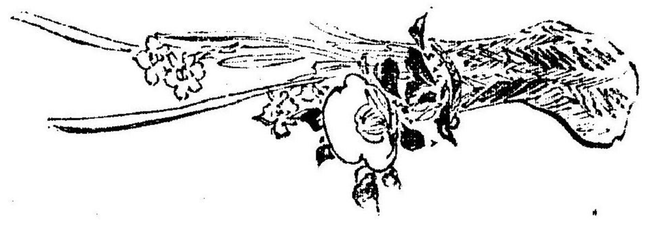
He *briefly* explained his meaning.

の如し、又時の副詞の中 alway, never, sometime, often, soon 等の如く不正確に時を示す副詞は動詞の前に來れども、to-day, this evening, last week等の如く正確に時刻を示す副詞は動詞の後に來る

He *often* came.

He arrived *yesterday*.

猶副詞の位置に關して種々の規則あり上例は其一斑なり。



第八章　前置詞

一四三　前置詞の例を擧げよ

答 前置詞とは名詞若くは代名詞と他語との意義の關係を示すために其名詞の前に置かるゝ詞にして、前置詞の後に置かるゝ名詞を賓語と稱す、Most flowers broom *in* spring. The boy went *to* school. の如し、at, in, on, to, by, for, of, off, about, between, above, beyond, round, since, through, from, toward の如き皆前置詞なり。

一四四　前置詞が賓語の後に來る場合を問ふ

答 其賓語たるものが、疑問代名詞か若くは關係代名詞なる時は、前置詞を其賓語の後に置くことあり(前に置くこともあれども)左の如し

What are you thinking *of*?

Where did you come *from*?

This is the man that we were looking *for*.

一四五　前置詞句とは何ぞ

答 習慣上常に一緒に用ひらるゝ所の、前置詞にて終りたる二個以上の語は前置詞句と稱せらる、例へば in spite of (にも拘らず) by means of (の手段にて) on account of (の爲めに) with regard to (に就て) for the sake of (の爲めに) instead of (の代りに) の如きもの是なり。

一四六　前置詞 At と In の區別を問ふ

答 時限にも場所にも at は狹小なるものに關して用ひ、in は廣長なるものに關して用ふ、卽ち左例の如し、

時限 { at *at* noon, *at* twelve o'clocks.
{ in *in* february, *in* autumn, *in* 1903.

場所 { at *at* the village, *at* Nikko.
{ in *in* Osaka, *in* Japan.

一四七　前置詞 Between と Among との別を問ふ

答 between は二個の人又は物の間といふ意を示し、among は三個以上の人又は物の中に交れることを指す時に用ふる語なり、例左の如し

Those two boys quarrelled *between* themselves.